

演劇創造

復刊

第139号

(第53巻 第2号)

平成30年(2018年)11月15日発行



—— 発行 全国高等学校演劇協議会 ——

〒270-0025 千葉県松戸市中和倉590-1 千葉県立松戸高等学校 TEL(047)341-1288 FAX(047)346-4002

事務局長 阿部 順

ホームページ <http://koenkyo.org/> メール info@koenkyo.org

第64回大会審査の経過

第64回全国高等学校演劇大会は、「真田丸」でも有名になった歴史の町・上田市の「サントミュージゼ（上田市交流文化芸術センター）」で8月7日（火）～8月9日（木）の日程で行われました。

今大会の専門審査員は、高等学校在学中に「鷹作マクベス」で優秀賞及び創作脚本賞を受賞し、大学在学中から劇団「柿喰う客」を主宰、多数の作品を手掛ける気鋭の舞台演出家である中屋敷法仁先生、多くの演劇評論の著作があり、大学でも演劇研究教育に携わる西堂行人先生、舞台芸術家として数多くの舞台作品に携わり、今回「舞台技術創造分科会」で舞台創作の楽しさに触れる機会を作ってくださった大沢佐智子先生、演劇ユニットG.comを主宰し、ATEC等アジアでの活躍も目覚ましい劇作家・演出家の三浦剛先生の4名にご担当いただきました。

顧問審査員は、東北ブロックから土田真一先生、中国ブロックから伊藤靖之先生、九州ブロックから岡崎賢一郎先生と、それぞれの視点から演劇の世界を生徒とともに作り上げてきた3名の先生にお願いいたしました。

2日目の上演終了後10校について審査会を行い、各校についてのそれぞれの視点から意見を出し合い、講評のベースを作りました。そして3日目の上演終了後、講評を経て、最終的に審査を行いました。

まず優秀以上の4校を決める投票では、丸亀が満票、3校が過半数の票を獲得しました。

丸亀「フットボールの時間」は、女性の解放と抑圧を描き、特にラストの台詞等に込められた重いメッセージが今の私たちが置かれている状況に通じる課題を示したこと等の脚本の素晴らしさと、ダンスを含めた緩急をもたせた優れた身体性や表現力を見せた点が高く評価されました。

仙台三桜「宇宙の子供たち」は、極小と極大のスケール感をもたせた演劇的な仕掛けと、台本の深みを見せていくうまさや強さ、現代的な家族の悲劇を描く生々しさ、舞台空間の効果的な使い方等が評価されました。

松本美須ヶ丘「M夫人の回想」は、一人芝居の中で葛藤するせつなさを存分に表現した存在感と、舞台でのリアルさを表現する身体技巧の素晴らしさ、人間の孤独を明確に表現している点、再構成の妙があり現代劇になりうる要素を持っている点が評価されました。

松戸「Time After Time ～インディアンサマーより～」は、メッセージ性の強さが明確に示されており、命への慈しみ、人間愛を強く感じ取ることができる点、随所に見せる舞台上のアイディアのおもしろさ、劇作としてのチームの大切さが評価されました。最優秀賞及び優秀賞については、結果のとおりです。

創作脚本賞については、課題と向き合う問題意識の高さを感じさせ、クオリティの高いセリフに心を揺さぶられた点が評価された朱雀^{せいしゅんさんか}「青春讃夏～僕らの時間～」の作者である京都府立朱雀高校演劇部・中谷眞紀さんに授与されました。

舞台美術賞には、バックライト、ムーブメント等を効果的に使用し、見せ方を知っている効果的な舞台空間の作り方が高く評価された山形東に、また内木文英賞には、野球の内部事情や日常おこりうる出来事を丁寧にリサーチし、自分たちの作品として完成させ、高い身体性を生かした躍動感あふれる舞台が他の高校の模範となった点を高く評価し、余市紅志にそれぞれ授与されました。

演劇大学連盟賞については、丸亀が受賞いただきましたが、副賞の講習会については、当該校のみならず地

区（ブロック）の演劇活動の活性化にぜひ活用していただきたいと思います。

今大会においては、戦前、戦中、そして海外での戦争と、私たちが絶えず検証し続けなくてはならない課題に取り組んだ作品があるとともに、部活動、スクールカースト、不登校といった現実と向き合う中で観る側に問いかけてくる作品、さらに家族のあり方、孤独と向き合う人間の存在の意味を突き付けてきた作品と、さまざまなアプローチをかけながら作品と対峙した各校の姿が印象的でした。

演劇の持つ表現の可能性を、枠にとらわれず、自由なスタンスで突き詰めていくことを大切にしていきたいものです。
 （事務局 三上 実・杉内 浩幸）

<p>【最優秀賞（文部科学大臣賞・全国高等学校演劇協議会会長賞・東京演劇大学連盟賞）】 香川県立丸亀高等学校 豊嶋了子と丸高演劇部／作『フットボールの時間』</p>	<p>創成館高等学校（長崎） 塚原政司／作『髪を梳かす八月』 長野県木曾青峰高等学校 日下部英司・手塚万桜・藤澤明穂／作 『Another Lifeが座る場所』</p>
<p>【優秀賞（文化庁長官賞・全国高等学校演劇協議会会長賞）】 （上演順） 宮城県仙台三桜高等学校 クリアウォーター／作 仙台三桜高校演劇部／潤色 『宇宙の子供たち』 長野県松本美須ヶ丘高等学校 W. シェイクスピア／原作 郷原 玲／翻案『M夫人の回想』 千葉県立松戸高等学校 阿部 順／作 『Time After Time ～インディアンサマーより～』</p>	<p>岡山県作陽高等学校 山崎公博／作 作陽高校演劇部／潤色『待ちの風景』 北海道余市紅志高等学校 千葉和代・余市紅志高校演劇部／作『おにぎり』 京都府立朱雀高等学校 京都府立朱雀高等学校演劇部・中谷眞紀／作 『青春讃夏 ～僕らの時間～』 山形県立山形東高等学校 奥山諒太郎・山形東高校演劇部／作『ガブリエラ黙示録』</p>
<p>【優良賞（全国高等学校演劇協議会会長賞）】（上演順） 富山第一高等学校 ユウと愉快な仲間達／作『ぼくらの青春ドキュメント』 栃木県立栃木高等学校 角海紀雄・栃木高男／作『卒業』</p>	<p>【舞台美術賞】 山形県立山形東高等学校『ガブリエラ黙示録』 【創作脚本賞】 京都府立朱雀高等学校演劇部・中谷眞紀／作 『青春讃夏 ～僕らの時間～』 【内木文英賞】 北海道余市紅志高等学校</p>

第64回 全国高等学校演劇大会 審査集計用紙

月日	上演順	ブロック	学校名	作品名	作者	創/既	中屋敷	西堂	大沢	三浦	土田	伊藤	岡崎	計	賞
8月7日(火)	1	中部日本	富山第一高等学校	「ぼくらの青春ドキュメント」	ユウと愉快な仲間達／作	生徒創作									優良
	2	四国	香川県立丸亀高等学校	「フットボールの時間」	豊嶋了子と丸高演劇部／作	顧問・生徒創作	○	○	○	○	○	○	○	7	最優秀
	3	関東(共通)	栃木県立栃木高等学校	「卒業」	角海紀雄・栃木高男／作	顧問・生徒創作									優良
	4	九州	創成館高等学校	「髪を梳かす八月」	塚原政司／作	既成(顧問既作)									優良
	5	長野県	長野県木曾青峰高等学校	「Another Lifeが座る場所」	日下部英司・手塚万桜・藤澤明穂／作	顧問・生徒創作									優良
8月8日(水)	6	中国	岡山県作陽高等学校	「待ちの風景」	山崎公博／作 作陽高校演劇部／潤色	既成			○			○		2	優良
	7	東北	宮城県仙台三桜高等学校	「宇宙の子供たち」	クリアウォーター／作 仙台三桜高校演劇部／潤色	既成	○			○	○		○	4	優秀
	8	北海道	北海道余市紅志高等学校	「おにぎり」	千葉和代・余市紅志高校演劇部／作	顧問・生徒創作					○		○	2	優良
	9	近畿	京都府立朱雀高等学校	「青春讃夏～僕らの時間～」	京都府立朱雀高等学校演劇部・中谷眞紀／作	生徒・顧問創作	○	○							2
8月9日(木)	10	東北	山形県立山形東高等学校	「ガブリエラ黙示録」	奥山諒太郎・山形東高校演劇部／作	生徒創作									優良
	11	関東(北)	長野県松本美須ヶ丘高等学校	「M夫人の回想」	W. シェイクスピア／原作 郷原 玲／翻案	顧問創作	○	○	○	○	○	○		6	優秀
	12	関東(南)	千葉県立松戸高等学校	「Time After Time ～インディアンサマーより～」	阿部 順／作	顧問創作		○	○	○		○	○	5	優秀



富山第一高等学校



香川県立丸亀高等学校



栃木県立栃木高等学校



創成館高等学校



長野県木曾青峰高等学校



岡山県作陽高等学校



宮城県仙台三桜高等学校



北海道余市紅志高等学校



京都府立朱雀高等学校



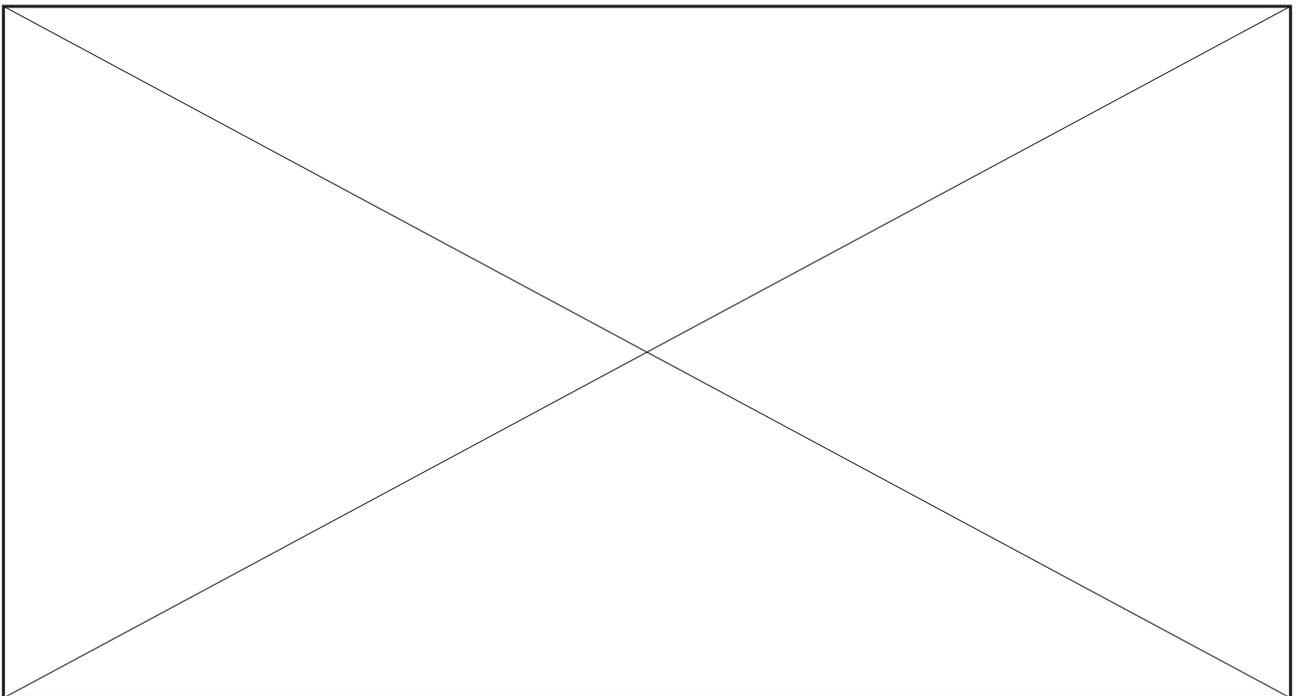
山形県立山形東高等学校



長野県松本美須ヶ丘高等学校



千葉県立松戸高等学校



「信州上田より感謝を」

中澤 祐太

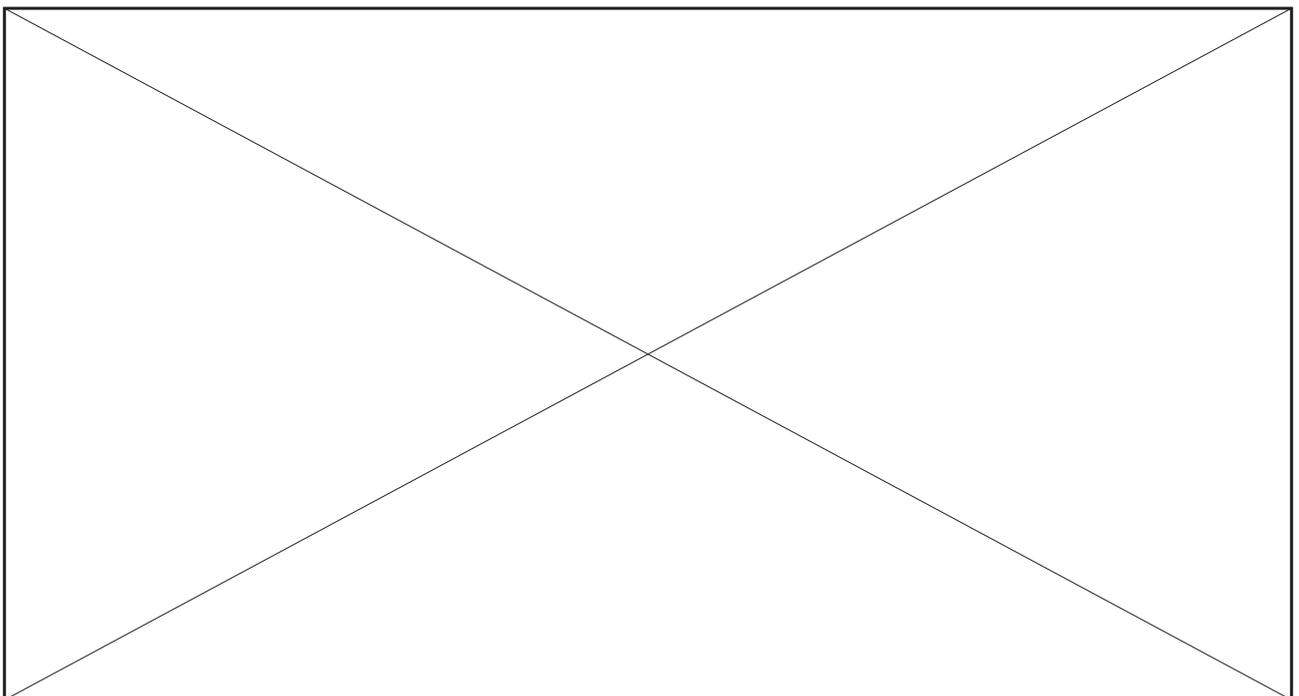
準備から片付け含め8日間にわたる第64回全国高等学校演劇大会（第42回全国高等学校総合文化祭演劇部門長野大会）を無事閉幕することができました。厳しい暑さを吹き飛ばすような心に響く舞台を造り上げてくださった上演校の皆様、長時間にわたる密度の濃い講評活動をしてくださった生徒講評委員の皆様、また、信州上田までお越しいただいた来賓、観客の皆様、全国高等学校演劇協議会事務局、理事の皆様、その他関係者の皆様、本当にありがとうございました。長野県スタッフ一同、感謝の気持ちで一杯でございます。

私は、2014年の茨城大会より全国大会に何らかの形で参加させていただきました。その時は、生徒講評委員引率顧問としての参加で、すばらしい上演、来場者の人数の多さ、生徒講評委員の活動に驚愕し、生徒と共に興奮しながら終電で長野に帰ってきたことを覚えています。（その時は、まさか自分が中心メンバーの一人になるなんて夢にも思っていませんでしたが…）その後、滋賀大会、広島大会を県内若手メンバーで視察させていただきました。視察を終える度に自分たちの顔は青ざめていきました。会場配置を考えたり、予算のことで頭を悩ませたり、視察の夜、ホテルの一室で深夜まで議論したことが思い出です。そして、去年は総勢50名ほどで宮城大会の視察をさせていただき、行き届いたおもてなしに一同感動し、「このままじゃ長野ヤバイぞ！」と、身が引き締まりました。その後、会議、研修、練習を重ね精一杯準備を行って参りましたが、至らぬ点が多くご心配、ご迷惑をおかけしたことをお詫び申し上げます。先催県の生徒の皆様、先生方には本当に多くのことを丁寧に、親身になって教えていただき助けていただきました。また全国事務局の先生方には様々な場面でサポートいただきました。改めて御礼申し上げます。不思議なもので、大会終了後、日中はほとんど大会のことを忘れていたのですが、もれなく毎晩総文祭の夢は見続けました。（うなされるとかは全くないのですが…）それだけ、意識下深くにこの大会があったのかなと感慨に耽っております。

この夏は豪雨や猛暑により、全国各地で多くの被害が出ました。被害にあわれた皆様に心からお見舞い申し上げます。このような大変な状況の中で、皆様のご協力のもと、無事大会を終えられたことが長野県スタッフとしての心からの喜びでございます。苦しい状況や困難なことが多い毎日の中で、演劇という1つの表現活動を通して明日もまた頑張ろうという勇気を与えていただきました。

来年の舞台は佐賀県です。長野県では苦しいことや難しいこともたくさんありました。しかし、こんなにも多くの方々と協力し、高校演劇のすばらしさを実感することができた数年間でもありました。佐賀大会の大成功を心から祈念し、お礼の言葉とさせていただきます。信州上田より感謝の気持ちを皆様へ。

（第42回全国高等学校総合文化祭演劇部門 現地実行委員長）



「私にとっての信州総文祭」

藤内 美里

信州総文祭が2018年に開催されると知ったのは、私がおっと演劇に取り組みたいと思っていた1年生の頃でした。顧問の先生のすすめもあり、実行委員長に手を挙げました。高校2年生の夏、発足したばかりの生徒実行委員会メンバーや先生方と、みやぎ総文の視察に行きました。高校演劇の全国大会を見たのは、この時が初めてでした。観劇をしながら、心の底から笑い、時には感動の涙を流しました。それと同時に、準備を進める上演校の真剣な表情や、会場前に並ぶ大勢のお客様、笑顔で仕事に取り組む運営の方々を目の当たりにし、自分ほとんどない役目に飛び込んでしまったのではと、少しだけ後悔の気持ちも湧きました。しかし、閉会式挨拶で壇上にあがり、ホールを一望した時、来年は私達が総文祭を運営していくのだと、期待で胸が高鳴りました。その後、長野県の演劇部門生徒実行委員会と力を合わせて準備を進めました。4月の上演校打ち合わせ会、本番の生徒交流会、係ごとの準備…時には意思疎通がうまくいかず、話し合いを重ねることもありました。上演順抽選会の練習やアルクマダンスの練習をしながら、会場を飾る装飾物を作りながら、しだいに連帯感も芽生えていきました。迎えた信州総文祭本番は、予想していなかった出来事もあり、目まぐるしい日々でした。しかし、昨年感じた胸の高鳴りを、さらに強く感じながら仲間と共に運営に取り組みました。演劇を心から楽しむお客様の姿、本番を終えて、やりきったという熱い涙を流す上演校の姿、そして、全国大会をよりよいものにしようと精一杯支える長野県の生徒や先生方の姿を見ながら、「やっぱり、演劇が大好きだ」と思えた3日間でした。

信州総文祭は大変素敵で、光栄な機会でした。47年に一度の機会が今年、長野県で開催され実行委員長として参加が出来たこと、全県の演劇部員や文化部員など沢山の方々に支えられて運営が出来たこと、すべてに感謝の気持ちでいっぱいです。来年、さが総文のご成功をお祈りしています。そしてこれからも、高校演劇がさらに発展していくことを願っています。

(生徒実行委員長 長野県佐久平総合技術高等学校)

成長感じた5日間

石山 花梨

全国大会が始まる2日前、生徒講評委員は全国各地から次々と集まりました。ほとんどの委員が初対面だったこともあり、最初は皆緊張している様子でした。私自身人見知りなので、「自分の意見が言えるだろうか」、「委員長として皆をまとめることができるだろうか」など、不安でいっぱいでした。そんな委員たちが打ち解け始めたのは夕方になってからです。生徒交流会で行う劇の練習をしていくうちに一人ひとりの個性を見つけることができ、委員どうしの間にあった壁がいつの間にかなくなっていました。一人ひとりの積極的な姿勢があり、最初の不安な気持ちが勇氣に変わりました。2日間の事前研修を終え、いよいよ私たちも本番が迫ってきました。

私たち生徒講評委員会は、講評委員が同じ「高校生の目線」で「高校生が創った劇」を観て、「何を感じ、何を得たか」を討論し、講評文を作成します。こう書いてみるとシンプルかもしれませんが、決して楽な活動ではありません。討論で発言する人が限られてしまったり、討論自体が深まっていなかったり、講評文にまとめきれなかったりなど、15人の色がうまく混ざり合わず、頭を悩ませたこともありました。それでも、自分たちの言葉で講評文を作成し、その作品の魅力を全国に発信しようと委員全員が一丸となって講評活動を行いました。

この5日間を通して、私を含め委員全員が人間的に大きく成長できたと思います。討論では人の意見を聞く力、発言力を、講評文作成では文章力を鍛えることができました。現在2年生である委員はこれからの部活にこの全国大会の経験を生かすことができるでしょう。また、引退した3年生は、これからの人生にこの貴重な経験を生かすことができると思います。ここで出会った14人(+1人)の仲間、先生方、サポーターの生徒、観客の皆さまに支えられたからこそ、このような有意義な活動をすることができました。昨年の宮城大会から引き続き、素敵な経験をさせて頂きました。本当にありがとうございました。来年の佐賀大会の講評活動がより一層素晴らしいものになることを心よりお祈りします。

(生徒講評委員長 長野県下諏訪向陽高等学校)

全国高校演劇を見ての感想



中屋敷法仁

第64回全国高校演劇大会に審査員として参加し、審査・講評を担当しました。以下、各上演校についての私見です。

■富山第一高等学校

ひとつの教室、ひとつのクラスを描こうという発想は大胆でした。しかし、魅力的な要素をもつ登場人物が多いのに、それが伝わりにくいのは、舞台上で存在する必要がなくなる瞬間があるからです。俳優同士のアクションの連鎖をデザインすれば、さらにキャラクターが生き生きして来ると思いました。

■香川県立丸亀高等学校

脚本の構成と主題の扱い方に関しては群を抜いて素晴らしかったです。さらによく伝わるためには、小道具としてボールやカルピスを実際に使う、伏線の張り方を精査し巧妙にする、舞台美術の使い方をクリエイトするなどの提案がありますが、それをおいても総合芸術作品としての完成度の高さに脱帽しました。俳優の演技も声・表情・身体のバランスが良かったです。

■栃木県立栃木高等学校

脚本の練り込みについては足りません。登場人物が語るべき内容、観客に聞かせるべき情報が、丁寧に整理されているとは思いませんでした。しかし、それでも楽しむことができたのは、俳優の魅力が十分に溢れ出ているからです。素敵な俳優と出会うという、演劇の原始的な喜びを教えてくださいました。

■創世館高等学校

誠実に、的確に演技を積み重ねていった印象です。言葉ひとつひとつを疎かにせず、観客が迷子にならないよう導いてくれました。舞台美術も見事だったのですが、しかし俳優の劇場空間に置ける動きが平面的になってしまい、いま観客に何を見せたいのか、何の台詞を聞かせたいのかといった意図がややぼや

けてしまう瞬間もありました。フォーカスコントロールを計算することで、さらなる感動を与えられたのではないかと思います。

■長野県木曾青峰高等学校

現役の高校生が演じるには、あまりにもイメージの遠い主題です。しかし生身の心と体を使い、全力で取り組むことで、観客の想像力を刺激してくれました。それぞれの場面のエピソードはとても良いので、もっとシーンごとの感情の起伏にメリハリがあればと思いました。銃やアルコールといった、高校生が実生活では扱わない小道具を扱いをもっと丁寧にして欲しかったです。

■岡山県作陽高等学校

エチュードあり、歌あり、ギャグ(?)あり、サービスピ精神に溢れた舞台でしたが、それぞれが面白いことが災いしてか、最も大切にすべき「姉弟」の関係が見えづらかったです。舞台上のあらゆる要素がしっかりと劇中人物たちの関係性や問題に帰結するように描くことができれば、その終わりなき解決を願う素敵な「待ちの風景」となったと思います。

■宮城県仙台三桜高等学校

時間・空間・世界観。演劇とはつまるところ、この三つをコントロールすることです。全上演校の中で、その三つを最も巧みに操ることができていたと思います。観客の想像力を時に愉快地、時に切なく刺激してくれました。その甲斐あって「宇宙の子供たち」という演題が、ケンジとタダシという単なる二人の兄弟だけでなく、この世界中に生きるすべてのこどもたちのことのように思える、豊かな広がりを感じる舞台でした。

■北海道余市紅志高等学校

野球部員たちの姿を通じ、地道ながらも人生を丁寧に歩み続けていく大切さを伝えてくれました。舞台上で本物の「おにぎり」をゆっくりと食べる時間に、さまざまな想像を働かせることができました。前半、挿入される「もち麦」の愉快さから、舞台の細やかな情報(人物設定・場所・季節)を取りこぼ

しそうになってしまいました。後半はそんなことが気にならなくなるほどのリアリティを俳優演技から感じました。

■京都府立朱雀高等学校

嬉しい、悲しいといった様々な感情を観客に「強制」してはいけません。観客と「共有」すべきだというのは私の主張です。俳優たちのしなやかな演技により、観客とのそれが完全に成功していました。「銀河鉄道の夜」が下敷きとなっているのならば、絶対悪＝ザネリのような登場人物がいた方が良かったとは思いますが、この作品のチームビルディングにおいては余計な提案かもしれません。

■山形県立山形東高等学校

まず、奥山諒太郎という才能あふれる劇作家との出会いを素直に喜びました。冒頭のシーンの台詞と場面構成は高校演劇史上、いや、わが国の演劇史上においても、他に類のない素晴らしいものだったと思います。ただ、そこから先の登場人物の抱える問題の提示と展開、回収が退屈に思えてしまいました。

■長野県松本美須ヶ丘高等学校

一人芝居はもっとも危険な表現です。たった一人で舞台を支えるという俳優の技術的なリスクはもちろん、劇の主題が「ひとりよがり」となり観客不在の状態に陥りやすいからです。「M夫人の回想」がその危険を鮮やかに回避出来たのは、圧倒的な劇場演出の力と、それを叶えたスタッフワークだと思えます。女優ひとりの内面世界を劇場空間全体に増幅させています。

■千葉県立松戸高等学校

全ての演劇は「今」起きていることを表現しますが。そこで語られる内容は「過去」と「未来」であるという奇妙なパラドックスを抱えています。「Time After Time」はそんな演劇の大原則に乗っ取りながら、全世代と時代に訴えるべき主題を鮮やかに描いていました。

(演出家・劇作家・劇団「柿喰う客」代表)

高校×演劇＝奇跡!?



西堂 行人

演劇でなければ描けない世界がある。そして高校生でなければ演じられない劇がある。高校演劇を一言で言い表すならば、両者が掛け合わされたさいに生まれる「奇跡」ではないだろうか。

どんな奇跡もそうであるように、多くの条件が揃わなければ生まれえない。なかでもとくに重要なのは、顧問を筆頭とする大人たちの支えだ。今回の舞台で心に残った作品は、高校生と顧問の共作が大半だった。大人は高校生の良さを引き出し、高校生は自らの「気づき」によってそれに応える。相互の関係が表現に結びついた時、人の心を打つ奇跡的な舞台が誕生するのである。こうした共同作業は演劇制作に限らず、今後の社会のあり方にとってもモデルケースになるだろう。今回、長野県上田市で開催された高校演劇全国大会に審査員として参加して、改めてその感を強くした。

審査とは舞台を裁定し、順位を付けることに意味があるのではない。舞台を共有する多くの観客たちの思いを代弁することであり、演劇の可能性をともに追求することにある。

1

今回で抜き出した秀作は、香川県立丸亀高等学校の『フットボールの時間』と千葉県立松戸高等学校の『Time After Time ～インディアンサマーより～』である。後者は旧作を顧問が現在の高校生に合わせて改訂し、前者は高校生たちの思いを顧問がていねいに掬いとりて舞台化した。いずれも理想的な共同創作になっていた。

『フットボールの時間』は百年前に高等女子師範学校でサッカーが授業に取り入れられたことから出発している。まず十人の女子高生の屈託なさが心地良い。袴姿の彼女らにとって、ボールを「蹴る」という行為は身体の解放につながる。「新しい時代」の自由の象徴なのだ。古い体質の学校教師たちはそ

れをこころよく思わない。その代表格の女性の先生を男子生徒が演じていることが示唆的だ。彼女らが慕う井上先生は弾圧され、革新的な校長は左遷される。終盤、怒りで舞台を踏みつける集団群舞のシーンは圧巻だ。また親や教師の目から自由になろうと合宿を画策する場面など、いつに変わらぬ女子高生の生態が描かれ、微笑ましい。ラストで、この百年の歴史がざっと語られ、最後に「百年後の現在は変わったのだろうか？」と観客に問いかける。時代に対する見事な批評性を感じた。

『Time After Time～インディアンサマーより～』は高校生が演じるのにふさわしい要素が詰め込まれていた。「引きこもり」はかつて「不登校」と呼ばれていた。この劇は25年前と現在が対比される。世話好きで少々お節介な朝香など達者な役者たちが揃っている。運動会で不登校児も参加できるように、綱引きの延長が教室に持ち込まれるアイデアもユニークだ。朴訥で不器用な山口先生のキャラクターも素晴らしい。この劇の妙味は、不登校生を励ます周囲の者たちの尽力でハッピーエンドに収めなかったことにある。問題解決はできなかったが、引きこもりなど「弱者」を肯定していくことに希望があるというメッセージは伝わった。元不登校児が大検を経て文科省の官僚になり、学校問題に取り組む。高校教師になって母校に戻ってきた朝香もかつての自分を思い出しながら、現在の引きこもりと向き合う。問題は解決しないが、その所在は明確にされている。

高校演劇は、観客の心の防備をたやすく解除してしまう。十代半ば以降の記憶を蘇らせ、その時代の情感を再体験させ、自分の原点に立ち返らせる。後者は観客席から拍手が出るほど、湧きに沸いた舞台でもあった。

長野県松本美須ヶ丘高等学校の一人芝居『M夫人の回想』もその迫力に圧倒された。シェイクスピアの『マクベス』を換骨奪胎し、夫人の視点から劇を再構成していく。マクベスはひ弱で頼りない性格で夫人と幼馴染み。マクダフの子供を無惨に殺害するのは、子供を死産させてしまった夫人のトラウマが原因だったといった独自の解釈が随所に織り込まれている。発想は高校生のものではない。わたし自

身、この種の舞台はいくつか観たことがあり、既視感に否めなかったが、一人芝居に挑もうとする勇気と挑戦を評価したい。しかも一人で空間を所狭しと動き回り、いくつも役柄を演じ分ける力量は称賛に値する。食器の小道具にも工夫があり、夫人の精神の不調に見合って装置が崩れていく演出は、水準が高かった。

2

高校を舞台にした“学園もの”は概ね活気にあふれていた。

富山第一高等学校の『ぼくらの青春ドキュメント』は大会の開幕直後ということもあってか、緊張で役者たちの声が聞き取りにくい面はあったものの、いまの高校生の実態に忠実で、自然な演技に好感を持った。元気で自虐的なギャグも辞さない女生徒に比べて、男子生徒は肩身が狭く、存在感が薄い。スクール・カーストも堅固だ。ラスト近く、はるみの長いモノローグはこの劇のテーマを集約していた。作者でもある彼女は自虐的に思いの丈をぶつける。ある意味で“高校生ならではの”と思わせる舞台であった。

山形県立山形東高等学校の『ガブリエラ黙示録』は幕が上がった瞬間、観客の度肝を抜いた。圧倒的な舞台セットはセンスに溢れ、続くシーンもビジュアルが秀逸だった。役者たちのノリが良く、観客の笑いも凄まじく、会場は一気に盛り上がった。だが神の登場と進路問題のテーマはギャップが大きすぎ、説得力に欠けた。生徒創作の意欲作であることは間違いないが、あと少しのアイデアと独創性が欲しかった。

芸達者な男子が揃った栃木県立栃木高等学校の『卒業』は楽しさに満ちていた。卒業前夜、卒業したくない生徒たちが繰り広げる悲喜劇。ストーリー性には欠けるが、役者たちがやりたいことをやり切る豪胆さと、その場でしか生起しえない躍動感にあふれていた。舞台の生命はやはり役者たちがいかに輝くかにある。

舞台を一カ所に固定し、物語を展開させた3つの作品に触れよう。

北海道余市紅志高等学校の『おにぎり』の舞台は

野球部部室の隣りのマネージャー室。ここで怪我で練習のできない部員とマネージャーがおにぎりを握り続ける。ありふれた日常的な行為だが、次第に象徴的な意味を帯びてくる。おにぎりは白球に見立てられ、幻想とも妄想ともつかぬ「おにぎり大作戦」のシーンでは爆笑を誘う。それとは対照的に、野球部員がたっぷり時間をかけて食べる無言のシーンに観客の視線が釘付けになる。緩急のメリハリのついた鮮やかな演出だ。一種のバックステージものだが、その設定を活かすなら、もっとも存在感のあったマネージャーの物語もぜひ観たかった。

長崎・創世館高等学校の『髪を梳かず八月』は、一幕ものらしく焦点が明確だった。原爆が落とされた8月9日、11時2分。観客が舞台上に据えられた本物の柱時計に気づいたのはいつだろうか。この劇は、この時に向けてすべてが進んでいく。仕掛けがシンプルな分、そこに至る登場人物の描き方が重要だ。そのためには生活の細部が徹底的に演じられなければならない。が、そこに緩みが目についた。ワンテーマ・ワンアイデアの作品には息詰まる瞬間に達する前の演技力が必須である。

宮城県仙台三桜高等学校の『宇宙の子供たち』は一見SF仕立てに見えるが、劇が進展するにつれ、いじめや家庭内暴力であることが判明する。主人公の兄弟は狭い人間関係がつくる日常世界と宇宙、極小と極大の幅の間で自由に行き来する。しかしその行為が現実からの逃避に過ぎなかったり、宇宙のものが出口のない小宇宙だとしたらどうだろう。どこまで行っても彼らには救いがない。それに気づいた時、笑いに潜む虚無が見えてくる。これは逆の意味でのカタルシスと言えよう。

3

異色作と言えるものもいくつかあった。

京都府立朱雀高等学校の『青春讃歌～僕らの時間～』は、現役の高校生でなければ演じられない舞台である。文化祭で宮澤賢治作『銀河鉄道の夜』を上演することになったが、キャストをどうするか。ここに筋ジストロフィーにかかっている転校生のたくみ君がやってくる。舞台に立つことに強い意欲を

示す彼を、部長は主役のカンパネラに抜擢する。意表を突くキャストティングに失望する生徒もいたが、最終的には受け容れられる。この劇の難しさは実際の障がい者が登場することだ。物語はフィクションだが、観客は実際の障がい者の現実と直面する。その現実と虚構のはざまに観客は劇に共感する。虚実皮膜を考えさせた舞台だ。

長野県木曾青峰高等学校の『Another Lifeが座る場所』はイラク戦争に関わった元兵士の精神障害を描いたものだ。題材が異質なため、等身大で演じるわけに行かない。そこで重要なのは、「リアル」の受け止め方である。素材に対して距離をとり、批評的に語っていく方法を持たない限り、上演は困難だ。どうすればリアルな台詞になるのか、どう演じたらリアルになるのか。舞台の試みとしては可能性を持たされたので、方法の獲得にさらにチャレンジしてもらいたい。

最後に、岡山県作陽高等学校の『待ちの風景』について言及したい。この舞台はベケットの『ゴドーを待ちながら』をベースに置き、それをさらに噛み砕いている。この劇の姉と弟が待ち望んでいるのは両親である。「ゴドー」に比べると、対象は明瞭だ。その分だけ、謎めいた部分が減ってしまった。終盤の一家の回想録は、シーンとしては美しかったが、説明が過多になった感は否めない。実はわたしが同作を読んだのは高校3年生の時だった。当時まったく理解できなかったことを思い出す。それもあって、ベケットが下敷きになった舞台が高校演劇に登場する時代になったことに感慨を新たにしたい。

高校演劇は、高校生の「今」を映し出すと同時に、演劇の「今」も映し出す。舞台に立って笑いをとることに長けた役者たちと、笑うことにためらわない客席。ノリの良い交流がとくに目立った。テーマや題材は更新され、高校演劇の進化を確認することができた。その一方で、演劇史や演劇論的な基礎知識がもっとあれば、舞台表現の独創性や革新的なアプローチが可能となるだろう。今後、さらなる研鑽を積み、方法の探究や斬新なものへの挑戦を続けていくことを望む。（演劇評論家・明治学院大学教授）

47年に1度のご縁



大沢佐智子

第64回全国高校演劇大会。大いに心揺さぶられた3日間。一観客として、参加校のみなさんと、そして自分自身と向き合うどっぷり演劇漬のこの時間を経て、また少し世界を捉える自身の視野が広がった気がします。これぞ「演劇」「舞台」に触れる醍醐味。ありがとうございました。

富山第一高等学校『ぼくらの青春ドキュメント』

「1人ぼっち」「こんな私必要ないのかな」内なる叫びに心震えた作品だった。スクールカーストが記号化された衣装（1軍女子のビビットなベストの色、弱小男子のモノトーン）は登場人物の関係性をビジュアルとして効果的に表現。背もたれの無い木製椅子を選択したことにより、役者の自由な動き、ホームルーム空間や文化祭練習場面へのスピーディーな場面転換を導きだしていた。教室空間を四隅に配した小柱でエリア取りしたことも観客の視線を集中させる効果あり、よい。

丸亀高等学校『フットボールの時間』

舞台を力強く踏み鳴らすラストシーンが印象的だった。自校のルーツを題材に100年という時間軸の中で現在（いま）この瞬間に感じている世界への苛立ち・地団駄のよう。女学校の校舎（門）を表現した格子。繊細な造形がとても美しい。“鳥籠”や“檻”にも見え、当時の女性の地位や心情を想起させ妙。ただ場面展開の中、屋内・屋外空間の表現が曖昧。照明でエリアを区切り屋内空間を表現するなどの工夫があってもよかった。

衣装の配色、フォルム、そして着付けがとても美しく、物語の登場人物としてのリアリティを創出していた。

栃木高等学校『卒業』

フルチンになり海に飛び込むような男子が持つ“エネルギー”“おおらかさ”に満ち溢れた作品だった。「自分に正直に」未来の自分たちへのエールを感じた。壁を立てずエリア明かりで進路相談室の内外空間を表現したのがよい。回想シーンへのスピーディーな展開や空間の自由な伸縮を効果的に表現で

きたので。作品が持っている“明るさ”に対し空間を少々暗く感じた。照明の光量やホワイトボードのサイズを大きくして明るい面を空間に配置するなどの工夫はできたかも。

創成館高等学校『髪を梳かす八月』

史実に基づいた物語に真摯に向き合い創作された作品。空間も当時の雰囲気づくりを丁寧に行っていた。欲を言うと、実空間のリサーチをもっと詰め空間デザインに活かせることより物語に共鳴する造形になると感じた。例えば、縁側の脚のつくり、和室における柱・^{なげし}長押・鴨居等の建築様式を抑える、庭先に夏の緑を配置するなど。

木曽青峰高等学校『Another Lifeが座る場所』

“人に添う”ことへ思いを馳せた作品だった。壊れていく人間に起こるフラッシュバックのように展開する場面。その場面展開に3枚の可動壁（両面づくり）は効果的に使われていた。途中、人が殺されるショッキングな場面の後、殺された人が次場面への移行の為にスッと起き上がる姿が転換明かりの中見えてしまうことへの違和感あり。死んだ人が起き上がるのを見せないよう可動壁に隠れ転換するなど工夫はできたかも。

作陽高等学校『待ちの風景』

舞台中央に配された待ち合わせ場所が、大海原に放り出された姉弟2人を乗せた漂流筏のように見え印象的だった。その待ち合わせ場所に2人が共有する記憶の風景がディテールとして表現されているとより効果的だったかも。シルエットで表現された幻想のように語られる「家族・幸せ」の場面。その中に自身の家族時間を投影してしまい心揺さぶられた。

仙台三桜高等学校『宇宙の子供たち』

家庭不和、暴力、罵り合う男と女。そんな大人の事情と共に生きる子供の叫びが生々しく響いた作品だった。

舞台中央に敷かれた円形カーペットは“宇宙船”“ブラックホール”“宇宙空間に浮かぶ惑星”を想起させ2人を取り巻く世界の中での孤独を印象付けた。観客の視線を集中させる効果もあり。中割幕を途中まで閉めたり全開したり場面によって使い分けたのもよい。物語のシーン展開に共鳴する空間づくりに繋がっていた。

余市紅志高等学校『おにぎり』

人の思いにたっぷり感じ入る作品だった。野球部部室の丁寧な作り込み故、マネージャーの部や部員に対する思いを感じ取れる空間になっていた。部室の空間を舞台面に対し斜めに配置することで、入口扉に視線を集中させる効果あり。見切隠しの下手黒パネルは黒パネルにしか見えず、丁寧に作り込んだ部室の質感とそぐわず。校舎の外壁として表現してもよかったかも。

朱雀高等学校『青春讃^{せいしゅんさんか}夏～僕らの時間～』

とても優しい（穏やかな気持ちになれる）作品だった。語り口が優しく言葉がスッと心に届いた。演劇部の教室には、机が2つずつ舞台面に対し平行に整然と点在していたが、同じ置き道具でも配置によってもう少し“部室の賑やかな雰囲気”を表現できたと思う。劇中劇で広がる星空の大空間。美しかった。

山形東高等学校『ガブリエラ黙示録』

物語全体を通して丁寧に空間デザインされていた。客席からの見え方をきちんと検証・選択したデザイン。装置衣装のビジュアルとしての白黒コントラストに脳内空間と現実空間の行き来や主人公の葛藤がリンクし、物語全体の世界観を感じ取ることができた。シンプルな白壁を基調に照明効果や小道具を足し引きする場面づくりは、物語が持つスピード感を反映することができ、よい。

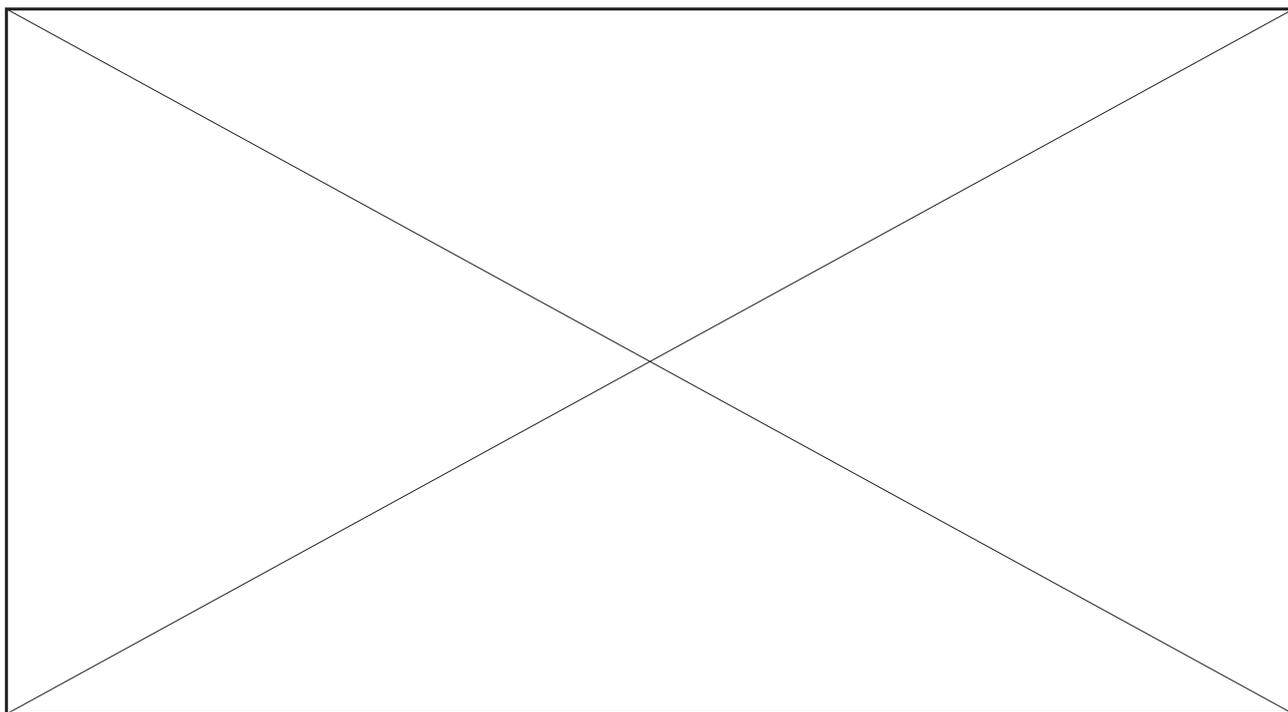
松本美須々ヶ丘高等学校『M夫人の回想』

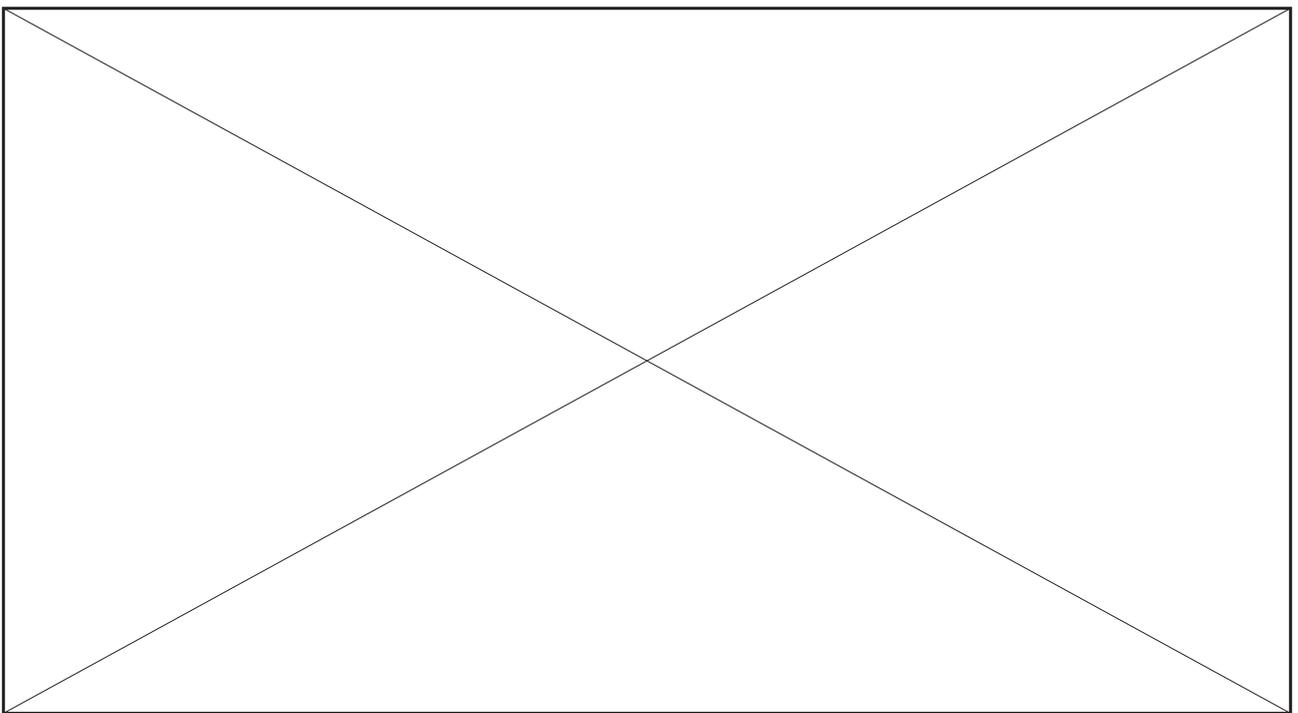
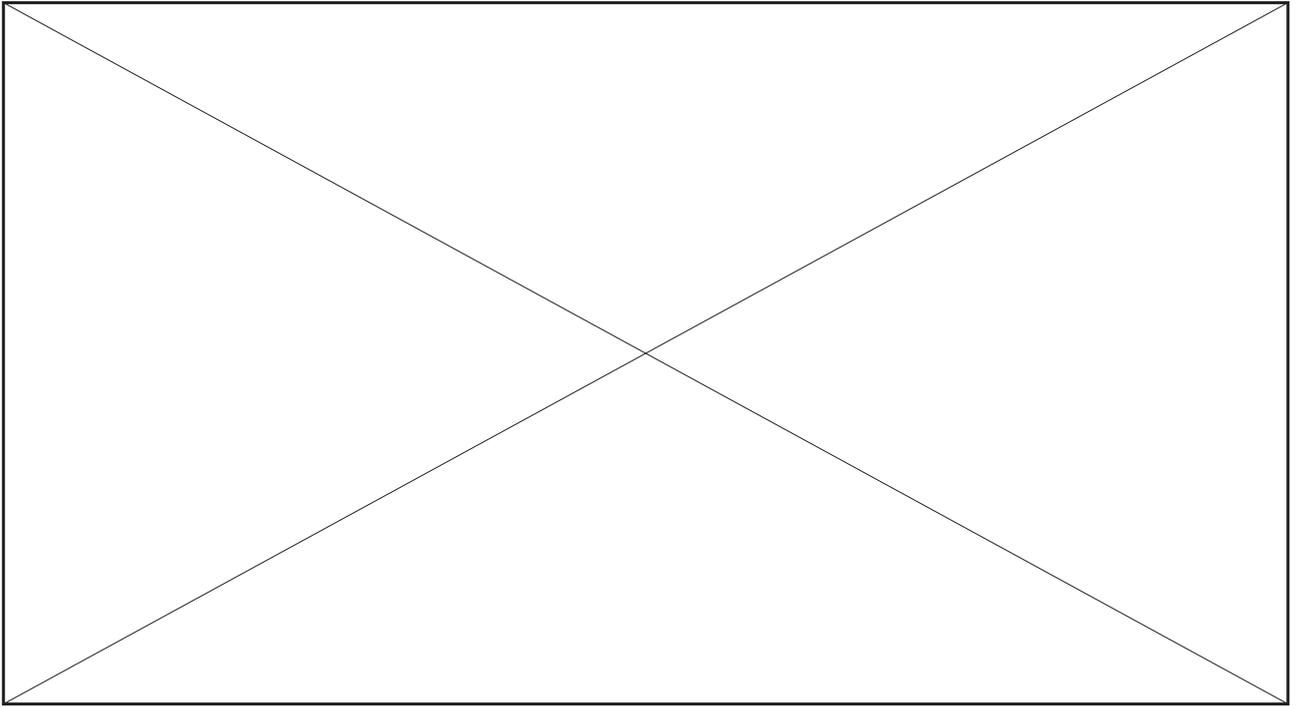
ひとりで葛藤する“女”の健気さ・孤独に切なく感じ入る作品だった。映像投影や屋台崩しの表現を取り込んだダイナミックな空間づくりはあっぱれ。役者のアクションに対する空間の機能性もよくデザインされている。ただ、その機能が物語の流れの中で個別に点在している印象あり。作品の質感に呼応する“作品全体の空間造形”が核として表現されていると、よりダイナミックに物語に共鳴する空間になったと思う。衣装に変化の工夫が欲しかった。衣装も空間造形の重要な一要素。今回のような一人芝居では尚のこと、M夫人の女性としての時間軸、エネルギーな女性であるが故そのエネルギーを“抑圧”されている環境・心情の変化等を造形表現できたと思う。ノースリーブのワンピースは素肌が見えすぎ＝開放感の印象あり。

松戸高等学校『Time After Time～インディアンサマーより～』

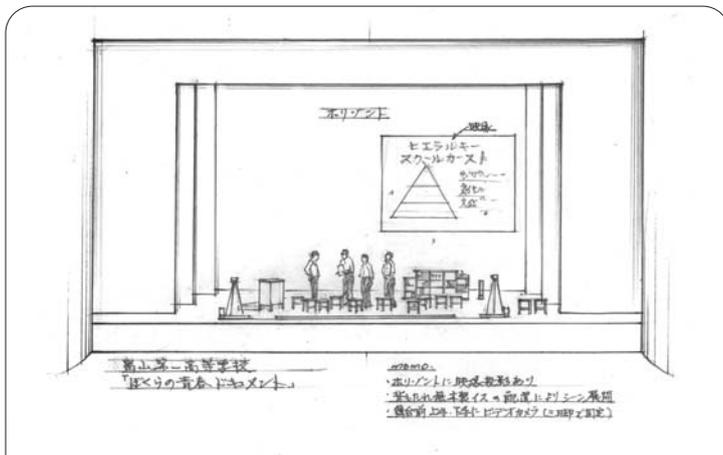
「あなたはあなた」「そばに必ず誰かいる」未来へのエール、命への慈しみに心震える作品だった。小教室空間は、上手下手2枚の可動壁、その間（＝舞台正面）に黒板や机を配置する3面壁囲いではないづくり。その風通しのよい空間は、不登校である主人公にとっての“居場所”としても効果的に表現されていたと思う。衣装・小道具も丁寧に作り込まれていた。

（舞台美術家）

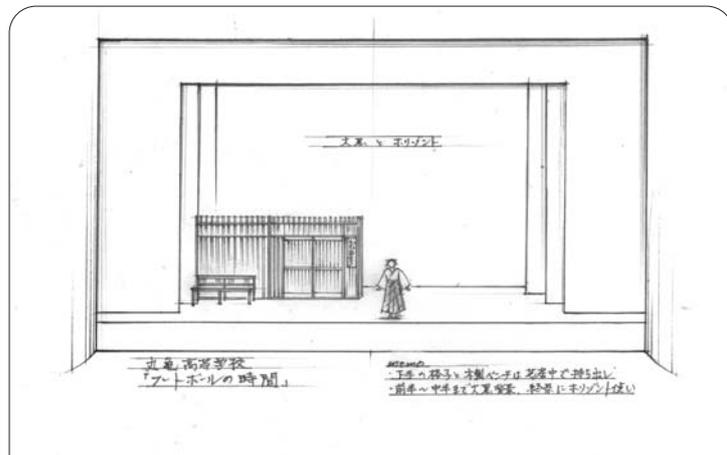




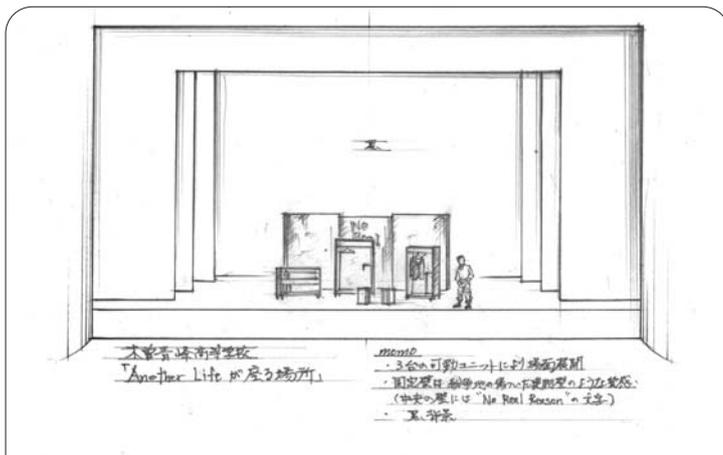
第64回長野大会



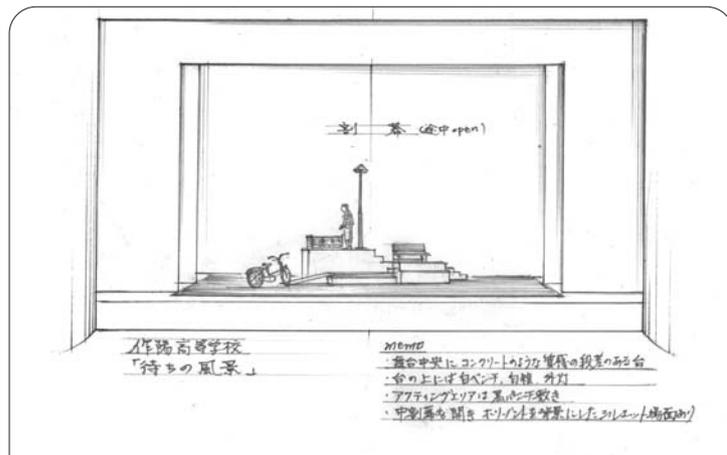
富山・富山第一高等学校
「ぼくらの青春ドキュメント」



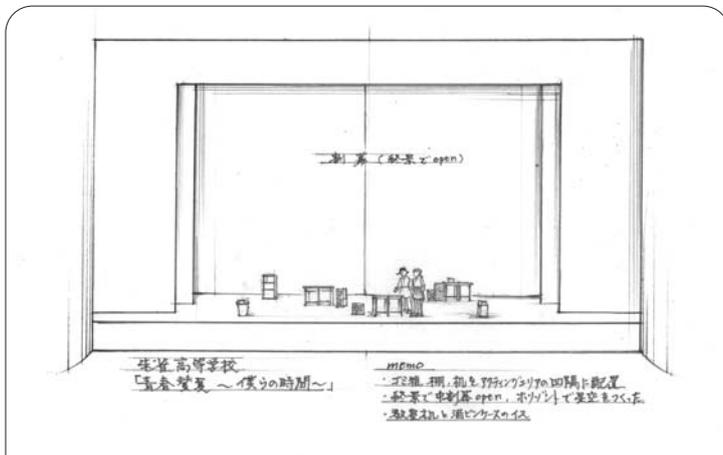
香川・丸亀高等学校
「フットボールの時間」



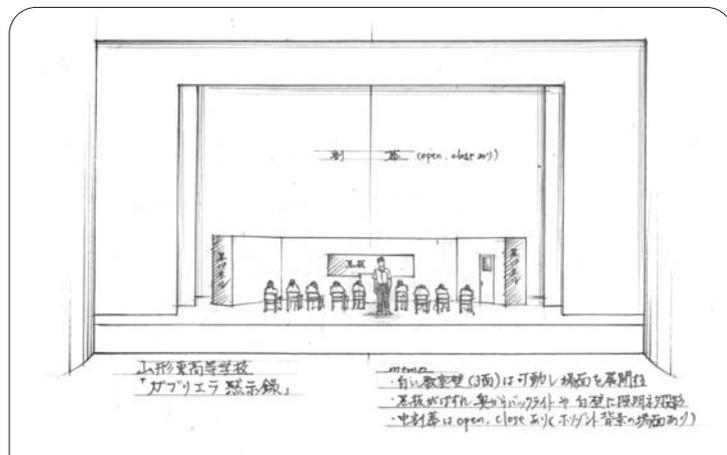
長野・木曽青峰高等学校
「Another Lifeが座る場所」



岡山・作陽高等学校
「待ちの風景」

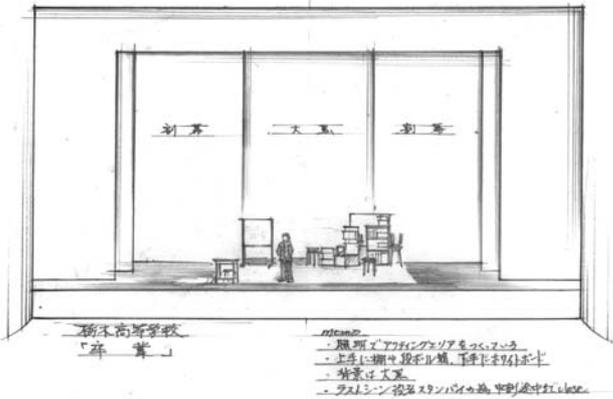


京都・朱雀高等学校
せいしゅんさんか
「青春讃歌～僕らの時間～」

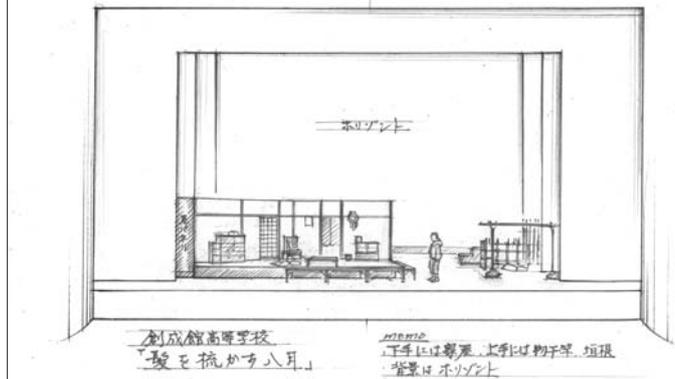


山形・山形東高等学校
「ガブリエラ黙示録」

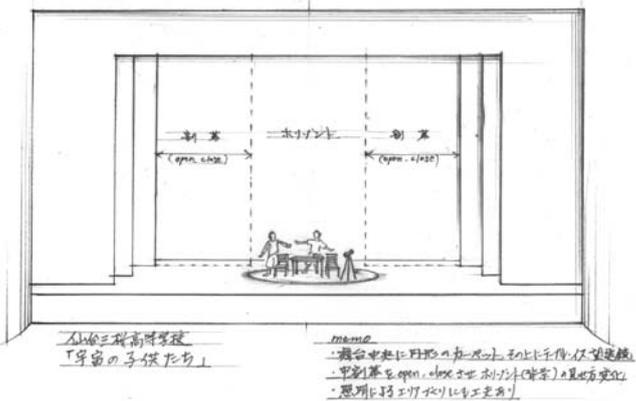
舞台図



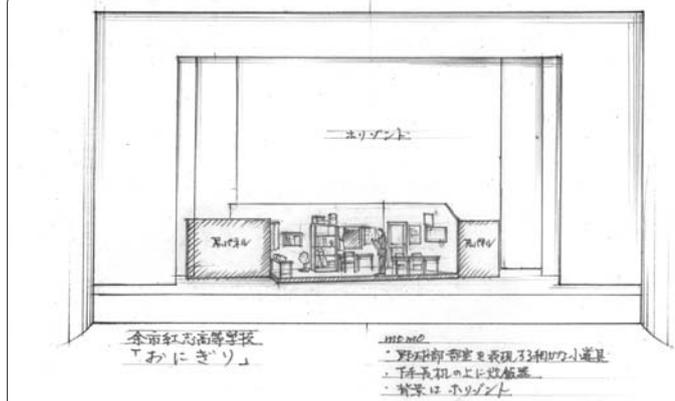
栃木・栃木高等学校
「卒業」



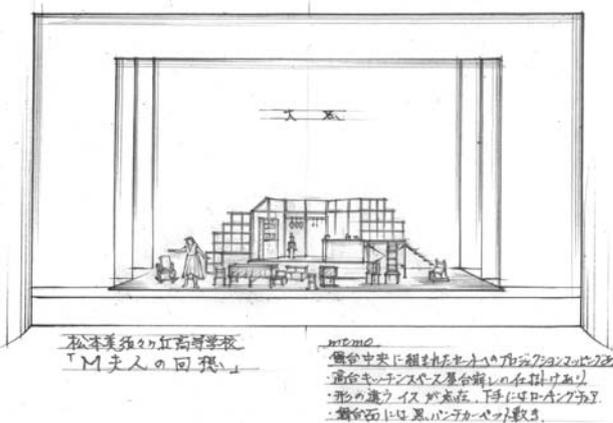
長崎・創成館高等学校
「髪を梳かず八月」



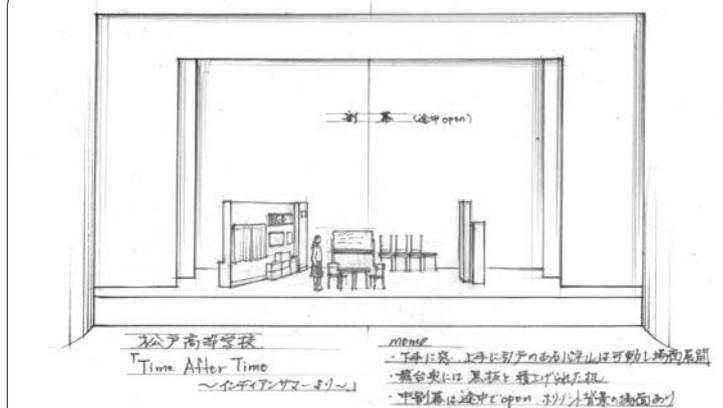
宮城・仙台三桜高等学校
「宇宙の子供たち」



北海道・余市紅志高等学校
「おにぎり」



長野・松本美須ヶ丘高等学校
「M夫人の回想」



千葉・松戸高等学校
「Time After Time ~インディアンサマーより～」

演劇において、人を納得させる「なにか」は、なんなのか？



三浦 剛

初めての全国大会での審査。まず率直な印象は、「よくまあ、色々な作品が集まるものだなあ」でした。全国まで勝ち抜いてきた12校ですが、作品のクオリティーや、演技力、表現力はバラバラ。しかし、やはり12校それぞれに勝ち抜いてきた「なにか」がある。それは若さの爆発なのか、チャレンジ精神の賜物なのか。演劇を生業にしている我々もその「なにか」を常に追い求めている事を改めて再認識した3日間でした。最優秀を獲得した丸亀高校は、演劇的には文句なしに最優秀だった気はしましたが、それ以外のチャレンジフルな作品達も記憶に残ってしまう演劇の不思議。3日間の祭典、皆様お疲れ様でした。さて、劇作家、演出家という立場からそれぞれの作品に対するちょっとしたダメ出しをさせていただきます。

富山第一高等学校『ぼくらの青春ドキュメント』

セットが観客席に対して横向きであった事を俳優達があまり意識できておらず、声の飛ばし方、自分たちの身体の見せ方が少々甘かった。また大人数が舞台上にいるため、重要な台詞が聞き取れない箇所が多々あった。人気、LINE、スクールカースト、ヒエラルキー、同調圧力。今を生きる高校生達にとって最も身近な問題と言える。現代を生きるリアルな高校生活で起こりえる事件の数々はリアリティーを持って展開された。惜しむらくは長台詞の欠如。終始短い言葉での会話が繰り広げられ、観客の心まで届く言葉が足りなかったように思う。

丸亀高等学校『フットボールの時間』

台本が秀逸。東京五輪、女性権利、サッカー、などでしこジャパン。今日性と普遍性を持った物語であり、同校の前身である丸女の女学生達が100年前にサッカーを追いかけている写真が発見された事を端に産まれた、この台本の誕生そのものが現代に祝福されている印象。俳優陣も発声方法、身体性が鍛えられていた。衣装である袴によって俳優に自動的に負荷がかかり、等身大以上の表現を支えている。惜しむらくは、スマート過ぎる仕上がり。もう少しサッカーというキーワードをいかし、土埃や汗、どろんこまみれの要素が欲しかった。

栃木高等学校『卒業』

THE男子校演劇の趣。同じ男性としては腹を抱えて笑えた。プロットの甘さ、いい加減さを補ってあまりある俳優陣の好演。複式発声と、身体の使用方を身につければより表現力があがる。ゴドーを待ちながらの大枠を使ってはいるものの「待つ理由」は少々薄弱。後半戦、笑いからシリアスに移行していくが、シリアスの分量が急激に増えて、観客からすると感動を強要されている感覚を覚える。シリアスを持ち出した分量と同量の笑いをはさんでいけば、泣きながら、笑いながら、でもやっぱり、泣ける芝居になったように思う。

創成館高校『髪を梳かず八月』

1945年8月9日11時2分・長崎。このキーワードのみで、戦中の日常が淡々と展開される意欲的な作品。残念だったのはSE（蝉）のボリュームと役者の声のボリュームがあっておらず、終始、大切な会話が蝉にかき消されてしまっていた。それが何かのメタファーなのかと考えながらの観劇となったが、やはりセリフが聞き取れないフラストレーションが優ってしまった。それぞれの俳優の演技メソッドがバラバラで誰を正解として軸に置いて演技をみればいいのか分からなかったのも観劇を難しいものになっている。良くも悪くも刻一刻と進む時計には意識を全てもっていかれた。

木曾青峰高校『Another Life が座る場所』

アフガン帰還兵のPTSDを高校生（しかも女子！）のみで演じるという挑戦的な作品。役者のテンションが低く、リアリズムなのか、ナチュラルリズムなのか捉えられないままに終演した印象。アリ・フォルマン監督の「戦場でワルツ」を鑑賞したような、不穏と不安感が終始付きまとい、観るものに直視を迫る脅迫にも似た強烈なテーマである。それは、俳優の呼吸が浅く、汗もかかず、実感に乏しいため、余計に浮かび上がるものなのか？ そのような考え自体がナンセンスなのか？ 観るものを困惑させる、悩ましい作品であった。

作陽高校『待ちの風景』

ゴドーを待ちながらをモチーフにした、両親を待つ姉弟の物語。二人芝居のためのセットとしては巨大なほどの陸の孤島を模した、ベンチと街灯のセットが秀逸。しかし、転換等々で人物が袖にはけてしまうことによってその効力は半減したように思う。二人の俳優の演技力は確か。特に歌唱力は抜群だった。最終景の影絵は非常に効果的で観客の想像力を刺激するが、少々長すぎてカタルシスを通り越してしまうのが残念だった。総じてローテンションで進む芝居信仰は好みの分かれるところではあるが、役者二人の演技力でカバーしていた。最後の虫の音のSEの編集の甘さが玉に瑕。

仙台三桜高校『宇宙の子供たち』

照明、音響、舞台美術が秀逸だった。是枝監督の『誰も知らない』を鑑賞した時のような苦しく、悲しい物語。SF要素（ファンタジー）をふんだんに使い、楽しく鑑賞させるが、徐々に虐待の現実が透けて見えてくる構成は憎い。観客の問題意識を深くまでえぐってくる。主人公の少年二人は女性が演じているのだが、終始少年にしか見えなかったのはあっぱれ。子供電話相談室が登場するが、子供達は携帯電話でロクスケ先生に連絡をしているところに違和感。昭和？現代？といういらぬ疑問がわいてしまった。若干、アンサンブルのムーブメントが甘く、勿体無い印象。

余市紅志高校『おにぎり』

舞台外から聞こえてくる野球部のSEが非常にリアルで、こだわりを感じさせる。台詞が少々聞こえにくい場もあったが、補ってあまりある「沈黙」の表現がこの作品の真骨頂か。野球部のマネージャー室で転換される、高校生の等身大の悩み、テーマと共に展開されるファンタジーが心地よく、洗練された笑いを提供してくれた。基本三人芝居で、3俳優

舞台上のリアル

土田 真一



この夏、上田で出会った12本の芝居。審査や講評という仕事をほとんど忘れてしまうほど、濃密で

刺激的な時間を与えてくれた。舞台上で展開する虚構の物語から、人間のリアルを紡ぎ出すことは本当に難しい。しかし上演校の皆さんは、楽しみながら、時には痛みを伴いながら、舞台上で真摯に人間に向き合っていた。

富山第一高等学校『ぼくらの青春ドキュメント』

少々荒削りだが、生徒自身で考え悩みながら創ったあとが覗えて、好感が持てる作品。自分たちが日常感じている様々な葛藤や生きづらさを、舞台の上で自然に表現していて、居場所を探しながら必死に生きている高校生の今が伝わってくる、とても切ない芝居だった。ここで取り上げられているスクールカーストの現実や残酷さを、もっと深く人物の内面まで掘り下げて描けば、この物語はさらにリアリティを増しただろう。

香川県立丸亀高等学校『フットボールの時間』

ジェンダーをめぐる普遍的なテーマ、役者のよく訓練された動き、袴姿でサッカーをやるというビジュアルなど、見る人を引きつける魅力満載の作品で、最後まで舞台に釘付けだった。差別され自由を抑圧されることの不条理が、女学生の目からとてもリアルに表現されていて、彼女たちの解放への願いは、時代を超えて今の私たちに、社会の有り様を問いかけるものになっていた。「変わったのかしら」この台詞が胸に残る。

栃木県立栃木高等学校『卒業』

役者たちが繰り出す、やりたい放題の切れの良いギャグ、戯画化されたダイナミックな動きなど、観る者を圧倒する勢いがあった。教師に仕組まれ卒業式前に集まった男たちの、妄想と荒唐無稽のファンタジーが小気味よく、最後はとても温かいコメディールになっていたのが見事。きれいにまとまりすぎている感じはあったものの、何より役者が皆楽しんでいて、彼らの元気でまっすぐな演技に、素直に共感できる舞台だった。

創成館高等学校『髪を梳かす八月』

舞台上を穏やかな時間が流れている。母と娘を中心に、長崎の何気ない日常が温かい雰囲気の中で描かれ

共に好感がもてた。あと、インディカ米も。彼は高校生三人を見守る野球部の監督だったのだろうか？

ラストに向けて真骨頂である「沈黙」で展開される件は取り逃がす観客も多いように感じた。独特の読後感が心地よい作品であった。

朱雀高等学校『青春讃歌～僕らの時間～』

ドキュメンタリー演劇というジャンルがあるとしたら、この作品をそうよんでよいだろう。当事者であるからこそ描ける台本の妙や、舞台上にいる俳優達全員で表現される空気感は、フィクショナルな作品では表現できまいと感じさせる。現実、筋ジストロフィー故に、車椅子生活を余儀なくされている「たくみ役」の前田さんと、それを取り囲む演劇部の面々。彼女、彼らの澆刺とした、天真爛漫な演技には嘘偽りなく感動させられるとても純度の高い「表現への憧れ」が感じられた。表現する理由、表現する責任を改めて考えさせられた。

山形東高校『ガブリエラ黙示録』

美術、照明、音響、ロスコ等々、演劇的技巧をこらした作品。役者勢の演技もしっかりしており、発声、身体共に訓練されている。バックライトや、ムーブメントなどもキャッチーな演出で飽きさせない。言語力に裏打ちされたテキストの力強さと、それを体現する役者の言語センスもピカイチ。冒頭から中盤まではオープニングの勢いそのままに突き進んでゆく。中盤での女子高生の殺し合いは、現代の高校生の生きづらさや、疲弊を反映したものであるようだが、あまりにも背負いすぎていて、もっと楽に生きると言ってやりたい。終盤でテーマが違ってくるのだが、如何せん消化不良で終焉した印象だった。

松本美須ヶ丘高校『M夫人の回想』

高校演劇ここに極まれりな上演作品だった。ロベール・ルパージュや、ワジディ・ムアウッドの作品のようなチリチリと痛くて熱いソコ（一人芝居）作品。舞台上の俳優は一人だが、そこに巻き込み、音響、照明、舞台部の協力なくしてはこの大作は演じ得ない。フランスの名優、ドミニク・ブランの「苦悩」という女優の一人芝居を観劇したさいの衝撃を思い出した。肉体と魂を観客席にさらけ出し、一人間から発せられる叫びはこんなにも「痛み」を伴うものかと感じたのを覚えている。高校生らしさも相まって「痛み」も和らいではいたが、圧巻の出来であった事は確かだ。

松戸高校『Time After Time～インディアンサマーより～』

作家の「人間愛」が全面に放出される作品だった。劇作のうまさ、展開の自由度、発送、登場人物を見つめる暖かい視線。そして、おせっかい。高校演劇ならではの劇作と思われる。不登校をテーマにした作品だが、高校時代の不登校の問題の解決で問題を終わらせるのではなく、結局は解決しなかった不登校の問題を25年という年月を飛ばし、再度、現代に問題提起してみせるのは巧妙。時事ネタとして終わらせるのではなく、聯綿と考えるべき「生命」の問題にまで昇華させている。最終景の妄想の中での卒業式、お涙頂戴の展開かと思いきや同等と「割愛」し、ユーモアを入れることも忘れていない。

(桐朋学園芸術短期大学専任講師、演劇ユニットG.com 主宰)

ていて、そのささやかな幸せを奪う、戦争というものの不条理を際立たせていた。かつて戦時下におかれた人々の葛藤や苦悩を、今の高校生が想像力を頼りに舞台上で表現するというのは、難しいかもしれないが大切なことだと思う。戦争とその時代をどれだけリアルに捉えることができるか、演じる側も観る側も試される。

長野県木曾青峰高等学校『Another Life が座る場所』

戦場の過酷な体験で心を蝕まれた帰還兵を、日本の高校生が演じるという挑戦が素晴らしい。問題は舞台上でこの物語をどうやって成立させるかだ。兵士の葛藤を自分たちのリアルとどう擦り合わせて表現するか、設定や構成をどう工夫するか、様々な課題が残る。しかし、私たちの生きている世界が益々人間性を失い、その残酷さが可視化されなくなる中、そこに切り込んでいく演劇の可能性を、この作品は感じさせてくれた。

岡山県作陽高等学校『待ちの風景』

切なく美しい舞台だった。離れ離れに生活する姉弟の心の風景が、他愛のない会話で綴られていく。2人が過去に置き去りになった何かを待ち続けている姿に、私自身、今まで失ってきた大切なものへの思いを重ね合わせながら観ていた。ただ終盤、2人が待っているものが、かつて存在していた幸せな家族の姿に具象化され、物語がややステロタイプな感傷に流されてしまっていた。もっと想像力を膨らませる展開が欲しい。

宮城県仙台三桜高等学校『宇宙の子供たち』

幼い2人の兄弟の心の内側を、宇宙旅行に重ね合わせながら巧みに描き、虐待を受ける子どもの絶望を浮き彫りにしていた。物語には一片の救いもなく、泣く事さえ許さないリアルな空間が舞台上に生まれていた。劇中に安易な希望を持ち込まなかったのが潔い。演じる側のどうしても伝えたい思いを、目を背けずに受け止める観客が居て、そこに確かな感情の共有が生まれたこと。それがこの物語の「希望」なのかもしれない。

北海道余市紅志高等学校『おにぎり』

心から演劇を楽しんでいるのが伝わってきた。体を張ったアイデア溢れるギャグが心地よく、言葉遊びも巧みで、冒頭から観客を引きつけることに成功していた。後半は、おにぎりを握りながら、3人の高校生のさまざまな葛藤や不安、夢、希望が交錯するという展開になっていくが、今度はそれを、抑制された会話や演技で表現していたのも見事。観る者

の想像力を刺激し、3人の物語にリアリティと奥行きを与えていた。

京都府立朱雀高等学校『青春讃歌～僕らの時間～』

芝居を観ているというより、今実際に起こっていることに立ち会っているような感覚。たくみと彼を取り巻く人達の世界は、演じている人間の現実と重なり合っていて、差別や偏見に晒された時の悔しさ、理解し信頼し合える仲間がいる喜び、将来への希望と一抹の不安、そうした感情の全てが、表現の幼さはあったものの、圧倒的リアリティをもって観客に迫ってきた。それをどう受け止めるのか、観る側が問われている。

山形県立山形東高等学校『ガブリエラ黙示録』

大人のフィルターを通さないアナーキーな魅力に溢れている。生徒創作の大きな可能性を感じさせる作品。今を生きる高校生の葛藤や不安や焦燥を、疾走感のある笑いで客席を引き込みながら、深くリアルに描き出していた。終盤の人物の描き方にやや甘さはあったものの、「人はどう生きるべきか」という正解のない問いに答えを探してもがき続ける登場人物、そこに託された伝える側の切実な思いが、観る者の心を揺さぶった。

長野県松本美須ヶ丘高等学校『M夫人の回想』

役者の存在感が抜群。アイデア溢れる舞台装置や効果的な音響・照明も見事だったが、この虚構の物語に命を与えたのは、何よりも役者の渾身の演技だった。マクベス夫人が、時間の進行とともに不安や恐怖に苛まれ、血の幻影に怯えながら崩壊していく。このスリリングな展開を、たった一人で演じきったことは驚嘆に値する。力のある台詞と優れた身体表現で、人間の持つ深い心の闇に、はっきりとした輪郭を与えていた。

千葉県立松戸高等学校『Time After Time～インディアンサマーより～』

とても温かい芝居だった。いわゆる不登校や引きこもりの問題は、どうしてもネガティブに描いてしまいがちだが、この作品では、不登校をきっかけに友との絆が深まったり、周囲の人たちの優しさに触れたり、むしろ明るく肯定的に描こうとしていた。不登校や引きこもりの時期も、一人の人生にとっては貴重でかけがえのない時間なのだ。そういった物事の本質に気付かせてくれる、演劇の持つ力を感じさせる作品だった。

(大学講師・演劇集団「ファットマンズクラブ」代表)

「いいものはいい」そして、やっぱり、「演劇に勝ち負けなし」



伊藤 靖之

12本の素晴らしい芝居をこんなにいい席で観られる幸せを噛みしめながら、観させていただきました。そして、芝居の見方の深さ、そして自分の感性を信じることの大切さを学んだ3日間でもありました。

①『ぼくらの青春ドキュメント』富山第一高校

高校生のクラスにおける自分をリアルに描いた作品。すべてが放送部のドキュメントという形で進んでいくのは面白い作りだった。ならば、リアルと虚構をもっと突き詰めるといいかなと思った。2群のリアルがあるなら、1群のリアルがある。生徒のリアルがあるなら、教員としても。男子・女子のリアル。放送部としては虚構をつくるのもリアルかもしれないと思った。

②『フットボールの時間』丸亀高校

ダンス、発声、身体の動きなど、個人的にも集団的にもかなりの力量を持って取り組んだ作品。なぜ、女役を男子が？と思わせておいて、これが後々ジェンダー問題を提起する布石となっていたとは驚かされた。時代は変わっても、物事の本質はそう変わっていないと訴えるラストシーン。でも、笑ってボールを蹴り続ける女子たちの姿には希望もちゃんと表現されていた。

③『卒業』栃木高校

男子の高校演劇はこうあって欲しいを大いに感じさせてくれた作品。意味もない、馬鹿馬鹿しさが心地いい。高校生の良さってこういうことと再確認。ただ、卒業前の馬鹿騒ぎが「切なさ」へと変わって行って欲しかった。最後にはもっと「笑い泣き（泣き笑い）」になって欲しかった。「卒業」というタイトルが生きるのは、まさにそこであると思った。

④『髪を梳かす八月』創成館高校

台本を読んだ段階で一番泣いた、そして鳥肌の立った作品。明日が来ないことを知らずに、明日を待ち焦がれる人たちの物語。切なさをずっと持ち続けながら、リアルに進む時計を観ていた。だからこそ、描かれるのはゆったりとした平和な時間であって欲しかった。間が大切。味わう間、躊躇する間。ちょっ

と台詞を詰め込みすぎかとも思った。でも、最後は凍り付くように静かな残酷なシーン、忘れられないものとなった。

⑤『Another Lifeが座る場所』木曾青峰高校

どこかのプロの劇団が演じるような台本。戦争の後遺症を描くことが、もちろん実体験のない現役高校生に演じることが果たして可能なのかと思って観ていた。

敢えて言うなら、汗、汗の匂い。血、血の匂い。砂、砂の匂いが伝えられたかということ、戦争の悲惨さはまずはそこにあるかなと思った。

⑥『待ちの風景』作陽高校

「ゴドーを待ちながら」の姉弟版。二人が待っているのは、両親であることがだんだんわかってくる。それも来ないであろうはずの両親。単純にそれで終わりかなと思わせて、終盤シルエットの回想シーンに入る。音楽のみの無言劇。思わず、泣けた。お客さんは、たぶん自分の思い出も混ぜながら観ていく。二重三重になって観客の心に残る作品となったと思う。

⑦『宇宙の子供たち』仙台三桜高校

この兄弟は虐待されている子供たちであるということ。芝居が進んでいくのにつれ、だんだんそれがわかってくるのが、実は恐ろしいつくりになっている。子ども電話相談室の芝居がややキャラを作りすぎのような気もしたが、後から考えれば、それこそが虐待に対して、他人が、マスコミが、大きくは社会がどう対応しているかの表現になっているのかと思った。

⑧『おにぎり』余市紅志高校

笑わせる前半、しみりとさせる後半。と考えていたのだけれども、見終わって、前半の米たちのシーンにも、少年たちの葛藤が表現されているのだと知り、実は深い台本だったのだと驚かされた。もう1回見たいと思った作品。それでも、実に前半は笑わせてもらった。どう見ても野球部員とマネージャーにしか見えない役者が繰り広げるドラマ。ご飯を炊いたにおいが漂う会場には、おにぎりの素朴な味わいが広がった。

⑨『青春讃^{せいしゅんさんか}夏～僕らの時間～』朱雀高校

突きつけられた課題の大きさと同時に、ほんわりと暖かいものをいただいたような不思議な芝居だった。

まさに、舞台と観客が同じ気持ちになって、これからの展開を心配したり、安心したりする芝居だった。会場がこんなに暖かい雰囲気になった芝居も観たことがない。ただ、突きつけられた課題は余にも大きい。演劇に携わる人すべてに、これからの芝居づくり自体を考えるきっかけとなったのではないかと思う。

⑩『ガブリエラ黙示録』山形東高校

開幕の衝撃的なシーンは全国の高校生に見せたいと思うほどだった。まさに、会場に嵐が巻き起こったと思うようなシーンの連続だった。天使・悪魔・神、勉強・進路・恋愛と生徒創作高校演劇といえこれと呼ばれるものを全部取り上げ、思いついた奇抜な発想を全部舞台に乗せたらこんなことになるのかと驚かされた作品だった。ただ、後半は少々失速気味。テーマについての結論とまで行かなくてもよいけれども、方向性を示すぐらいはして欲しかった。

⑪『M夫人の回想』松本美須ヶ丘高校

まずは、一人芝居を1時間演じきって、客を引きつけた役者の体力と技量に感服。そして、それを支える舞台セットの大胆さと細やかさに驚く。プロジェクション・マッピングや「家揺らし」「椅子回し」が高校演劇で観られるとは思わなかった。それなら、舞台をもう少し整理を。いろいろな登場人物（実際には見えない）が客からもそう見える（居るように見える）ように位置を固定化すると見やすくなるかなと思った。

⑫『Time After Time～インディアンサマーより～』松戸高校

ここ何十年抱えている教育問題「不登校」。それを一生懸命救おうとする立場からの物語。教員としてはかなり共感できるテーマ。無口キャラの山口先生の応援、群読は、それだけで涙が出た。今まで生徒の不登校に関わった教員・親・友達の代弁であったと思われる。親子、先生と生徒、時代は移っても、変わらない大事なものはあると確認させてくれた作品だった。

以上、思いついたことを書きましたが、やはり「全国大会ってすごい」が、率直な感想。大会を終えて、やはり「演劇に勝ち負けなし」を再確認しました。上演校の皆さん、上田の皆さん「感動をありがとう」。

（島根県立横田高等学校 演劇・放送部顧問）

2018年、信州。サントミュージゼにいた私たち

岡崎賢一郎



①富山第一高校『ぼくらの青春ドキュメント』。スクールカーストという縦社会に生きる高校生とその軋轢の中で苦しむ個の「私」。

現代的テーマをドキュメンタリーとして切り取る趣向は斬新。舞台上の表象が「画面上のこと」であり、観客と同一な「こちら側」の存在が何かを明確に提示すると構造がよりわかりやすいか。観客（こちら側）が映像として見ているのは全てではなく、その裏にあること＝映されないことの意義付けをしたいとも思うが（それが演劇的であると考えて）、今の高校生にとってリアルが虚で映像が真なのかもしれないとも感じた。

②香川県立丸亀高校『フットボールの時間』。史実をもとにした芝居。素晴らしい身体アンサンブル・ストーリー展開もさることながら、文字などを用いた遊び・牢屋に見えるセットも面白い。旧習にとられる先生役を男性が演じることで、男性性が女性性を抑圧するという構図が明確になる。その構図が今もなお続いているという告発は昨今の問題にも繋がる。個人的に彼女たちが追い求めたボール（理想）の色は黒ではなく白＝希望で、そのボールで閉塞した現代社会に風穴を開けて欲しい（ゴールを奪って欲しい）と思ったラストシーンではあった。

③栃木県立栃木高校『卒業』。翌日に卒業を控えた男子高校生たちの大騒動。「男子高校生ノリ」に満ちたお芝居だが、意味づけを拒否する無謀な／爆発する身体こそが高校生の日常。馬鹿馬鹿しいことを真剣にやれることは卒業を迎えた今しかない、今これが最後であるという「瞬間」の舞台であり、全国大会の舞台に立つ演者のリアルと相俟って、刹那を生きる高校生の姿を清々しく感じた。彼らがキヨハラ先生という絶対的な庇護者の元を離れ、大人として向き合わねばならない明日からの現実の厳しさも感じられればより卒業の切なさを味わえたか。

④創成館高校『髪を梳かず八月』。八月九日の長崎。戦時下にあるがどこか「あたたかな日常」が流れ、明日に向かって希望に満ちた言葉が語られることで、時計がリアルに刻む「最期の瞬間」の悲劇性が高まっていく。登場人物たちが語る明日は彼らにこないことを観客だけが知っているという悲劇の構造は、古典にも通じる。一分一秒と刻まれていく時の中で、生きていくこと、戦争（原爆）の悲惨さについて深く考えさせられた。セット・小道具・衣装のリアル

さも当時の生活を感じさせ、その場にいる臨場感があった。⑤長野県木曾青峰高校『Another Lifeが座る場所』。イラク戦争・PTSDをテーマにするという、挑戦的・意欲的な作品。一方テーマ・作品世界をどのように舞台上で具現化するかという点においてはやや物足りなさを感じたのも事実。家庭の風景はまだしも、砂にまみれ銃口をテロリストと思しき住民に向けた修羅場をどう見せるのか。そこにリアルさがないのは日本に住む我々の「遠さ」のメタであるという指摘もあったが、やはりその「ギリギリ」を見たい。砂を恐れるならば、「砂」感（テクスチャー）を感じさせる工夫があればよかったか。⑥岡山県作陽高校『待ちの風景』。ゴドー待ちの変奏。神様が来ないこと（神の不在）は悟りながらもしかし待ち続ける現代の私たち。離婚して離ればなれになった姉弟たちが叶わぬ「家族」への回帰を無人島に見える公園で願い続ける。終盤の神さま（家族）のシルエットは、日本の原風景でもあり、強く胸に響く。ただ、登場人物が出入りすることでその場に蓄積されるはずの「家族への思い」が周囲へ流れ出してしまったようにも思えた。灰色の島に取り残された二人がひたすらそこにとどまり続けること・待ち続けるとその不在・切望（郷愁）が強くなったかもしれない。⑦宮城県仙台三桜高校『宇宙の子供たち』。一見すると父からもらった望遠鏡を覗き、外の（宇宙の）夢の世界を想像する子供たちの世界。だが実は、汚れた服・伸びた髪で示唆される児童虐待・ネグレクト。大人たちの無関心、そして闇の中に潜む敵が両親であるという救いのない世界に深く絶望する。明るく賑やかな演出・舞台セット、色彩感が彼らが逃げ込まざるを得なかった幻想の様で、胸が苦しくなる。経済的貧困が拡大する日本の現状を、演劇的な手法を用いて切り取って見せた劇作のうまさ、少年二人のリアルさに大いに感心させられた。⑧北海道余市紅志高校『おにぎり』。野球部のマネージャー室で「おにぎり」を握る三人。炊飯器の中を想像する妄想シーンは、単なる遊びではなく、今の彼らの「うまくいかない」現実のメタと感じたのはやや深読み過ぎるかもしれない（炊飯器も三つある）。抑圧から解放され、炊き上がったご飯には神さまが宿り、白球にはなれずともおにぎりとなって誰かの役に立つ。何気ない日常を描きつつも進路に悩む高校生の姿をそこに感じた。ややもすると全てセリフで説明してしまうが、それをあえて語らない演出にも好感を抱いた。⑨京都府立朱雀高校『青春讃夏～僕らの時間～』。実際に車椅子に乗った「たくみくん」が2018年・信州上田の舞台上にいる

ことが、「青春讃夏」であり「僕らの時間」だと感じたお芝居だった。現実の舞台に立つ苦労は劇中で描かれる対立だけではなく、もっと辛く厳しいものであったろうとも想像し、会場一体となって応援した。セットの配置などテクニカルな部分の習練や、みんないい人過ぎる（現実世界はもっと厳しいのではないかという想像）点はあるが、それでもなおこのお芝居は優しさに満ちた素晴らしいものだった。⑩山形県立山形東高校『ガブリエラ黙示録』。度肝を抜く冒頭。照明・セット、熱量。高校生の鬱屈した内面をキャスト・スタッフともに高い技術で見事に表現していた。圧倒された。一方で強烈な内面性の吐露が最初に置かれたことで、以降主人公が自らの進路・生き方、己の実存に苦悩することへの共感がしにくかった。たとえ内面であってもカタルシスに満ちた世界を構築できるならば、その破壊衝動で進路も学校も全て吹き飛ばし、観念を離れた身体で自らの人生を紡ぐ主人公の姿を見てみたいと感じた。全体の構成（構造ではなく）を整理するとより思いが伝わったかもしれない。⑪長野県松本美須ヶ丘高校『M夫人の回想』。母になれなかった女・マクベス夫人が一人語りをするお芝居。舞台に存在し続けるエネルギーが素晴らしく、会場全体を60分魅了し続けた。また大がかりなセット・演劇的な遊びに感心・圧倒された。揺れる部屋、プロジェクションマッピング・生中継など、予想だにしない舞台。ただ、これが「回想」である故に彼女を取り巻く環境は全て幻として浮遊させ、その幻の中に、夫人の希望・挫折・狂気を紡ぎ出しても良かったかもしれない。セットのリアルさが逆に世界を限定しているように感じた。⑫千葉県立松戸高校『Time After Time ～インディアンサマーより～』。不登校になった少女をなんとか助けてあげたいと願う女の子。理不尽すぎるほどのおっせっかい。だが、そうしたおっせっかいの中で人は救われるし、生きていける。部屋に引き込まれた綱の先には外の世界が感じられ、ラストの窓のシーン（90度回転する）も含め空間の見せ方の巧みさを感じた。また、物言わぬ男性教師がエールを送るシーンは、「語る必然」をそこに感じ、心動かされる。作り込まれたフィクションであることは承知しつつも、琴線に触れ涙する、生きていく勇気をもたらした芝居であった。

こんな素晴らしい瞬間に立ち会えたこと、本当に感謝しています。ありがとうございました。

（久留米大学附設高等学校演劇部顧問）

第1分科会

演技

「演劇は冒険 勇気をもってチャレンジし、限界を超えよう」

講師 三浦 剛

参加希望者が200名近くという大人数だったが、大ホールの舞台を使って、全員が主体的に取り組むことができた。この講習では、「呼吸」・「言葉を使わないコミュニケーション」・「言葉で人を動かす」の3点についての講習が行われた。「 」の言葉は実際に三浦先生からいただいたことばである。

【呼吸のトレーニング】「演技の神髄は呼吸 セリフは道具でしかない。感情・関係によって呼吸は変わる」

講師の三浦先生は、今回の発表を見ていて呼吸が浅い人がいることが気になった、意外に腹式呼吸できていない高校が多かった。と述べられた。腹式呼吸の練習を寝た状態から始め、その後、起き上がって、2倍速・通常のスPEED・ストップモーション・上半身を飾って移動・上半身脱力など様々な条件で舞台上を移動しながら呼吸を意識することを教えていただいた。「ぼんやり立たないで。対象をとらえながら腹式呼吸。対象との関係を深くして。」常に「深い呼吸」を意識すること、何かと対峙していることを意識することが繰り返し述べられた。また、「隣の人を見ないで・演劇には正解はない・自分に集中して・周りには関係ない」という言葉に、生徒たちも、自分なりのとらえ方を大事にしながら動いていた。

【言葉を使わないコミュニケーション】「言葉は不完全 呼吸はうそつかない」

二人組になり自己紹介した後、目をつぶった相手の人を手のひらと呼吸だけで動かすこと、王様と奴隷という設定で王様の手の動きに従って奴隷が距離をとることを行った。二人きりの世界にならず、お客さんがいることを想定し、下半身の筋肉使わずにずっしり動かすこと、呼吸を意識することの大切さが述べられ、「舞台上のリアリティを担保してくれるのは身体なので身体からくるものを大事にしてほしい。」ということも伝えられた。

【言葉で相手を動かす】「いろんな『いいよ』を試して」

二人組で上手と下手に分かれ、動きたくない下手側の人を、上手側の人「いいよ」という言葉だけで動かすことを行った。下手側は、「いいよ」が心に響いたら一歩近づく。近づいてもいいが、触ってはいけない、言葉だけで相手を動かすという内容だった。もう1種類、上手側は近づいていくが、下手側が「だめ」といって来させない。上手側は「だめ」という言葉が刺さったら止まる。ということも行った。

生徒たちは、それぞれの課題に全力で取り組み、短い時間のなかにギュッと詰められた先生からの数々のエールも一人一人がしっかりと受け止められたことと思う。

(文責 長野県松本蟻ヶ崎高等学校 宮坂 聡子)



第2分科会

演出

人間感動

講師 中屋敷法仁

「演出とは、俳優やスタッフの能力を広げていく仕事であり、彼らだけではとどりに着けないところへ導くことをする仕事です。つまり、ツアー・コンダクターのようなものです。」

約80名ほどの参加者を前にして、こんな言葉から講習会は始まった。講師が用意した抜粋台本4作を、参加者の中から役者を募り、その場でさまざまな演出をつけていくという実演を体験することができた。その

中で、語られた講師語録をまとめる。

①「検察官」作・ゴーゴリ（浦雅春・訳）

感情や人物の関係性を構図で見せる。立ち位置によって効果は変わる。フォーカスコントロールを使う。移動速度のギャップをつくる。俳優と俳優の距離感をはかる。感情を構図で見せるには、何がベストかではなく、何がマストかを考える。

②「ロミオとジュリエット」作・シェイクスピア（中野好夫・訳）

ムードの可視化、イメージの共有をはかる工夫をする。例えば、体の硬い柔らかいの差をつける。視線を合わせるか、合わせないか。（見つめないことの残酷性）無言の役者を出すことにも意味はある。小道具にどういう意味があるのか。（小道具は、感情表現のために使う）

③「驟雨」作・岸田國士

舞台上は、何もない空間ではなく、何でもできる空間だ。台本だけに頼るのではなく、クリエーションしていく場だ。役者がそこへ行かなければならない必然性をつくる。会話しかならない時間は、そんなくない。作業をしながら会話する。ならば、そこにノッキング（突発的中断）を加えることで舞台はさらに豊かになる。

④「三人姉妹」作・チャーホフ（神西清・訳）

舞台は、同時にいろいろな演技が混ざり合う場だ。セリフのない役者は、とてもよい小道具となる。その場にいる空気感・雰囲気息づかいで表現する。セリフの前動機をつくる。（気持ちの導線をつくる）

さらに、まとめとして、

演出の仕事は、内面の可視化をすすめる作業であり、「それはダメ」ではなく、「他にいいものはないか」という提案をし、役者の個性を引き出すことです。だから、脚本がすばらしくなければ良い演技ができないということにはならない。演出家は、人間観察ではなく、人間感動こそが楽しいと思えるもので、ボツにした量が、演出の力です。

（文責 長野県塩尻志学館高等学校 高野 憲児）



第3分科会
演劇研究

演劇は五感全部を刺激する

講師 西堂 行人

最初に、講師から演劇や俳優に関わっての話があった。

高校卒業後、演劇を続ける選択肢としては、専門学校か、大学か。大学で実技をやっているところは8つくらいしかないが、文学部の芸術学科演劇身体表現コースのような座学・研究をやっているところは全国にある。演劇に関わるにしても、実技をやる、大学に行く、専門学校に行く、あるいは普通の大学に行って演劇部として活動する道もある。演劇を続けるには、舞台に立つ、劇作・演出・舞台美術・照明など実際の現場に関わるというのもあるが、もう一つは、良い観客になって舞台を支えるというのもある。良い観客にとどまらず、自分で発信したいときには、演劇の評論家というものもある。これまで演劇に関わってきたのだから、何らかの形でそれを生かしてほしい。俳優が職業になる人は、ごく一握りだけ。演劇をやりたい仲間を集めてグループを作り、書いて演出して俳優としてやっていく、これが一番早い。演劇を続けたい、才能

があると思っても、大学卒業、結婚、子どもの誕生の3回のハードルをくぐり抜けて、40歳になってようやく一端の俳優になれる。俳優を追いかけてきた人は、最初は給料が低くても、50歳くらいで普通の就職をした人と並んでしまう。年を取れば老優と呼ばれて味が出てくる。演劇をやっている人、芸術活動をやっている人は、最初は負けているように見えるけれど、最終的には勝つ。だから、演劇活動を志したら、人生長く、30年、50年というスパンで考えて欲しい。目先の3年とか5年では、演劇など芸術の底は掘りつくせない。10年、20年やっていたときに、だんだん面白みがわかってきて、奥深さに触れるようになってくる。

演劇のメリットは、集団であるがゆえに達成できることにある。他人とどうつき合うか、達成できたら一生残る。表現したいという欲求は、現状に満足していないからで、現状に満足している人は、表現に向かわない。死・恐怖・不安を見ることで、現実を認識していく。認識していくことは喜びにつながり、今後を生きていく力に変えていくことができる。文学・美術・音楽・映画などいろいろな芸術ジャンルがあるが、演劇ほど人生の力になってくれるものはない。劇場は毎日同じ作品が上演されていても、同じ台本、同じキャストでありながら、違う上演が行われている。演劇はよく一回性という。今日この日にこの劇場でこれを見たというのは、とてつもないことを体験している特別な時間だと思う。映画は全国どこで見ても同じ。音楽もライブ性はあるが、音だけ。演劇は五感全部を刺激する。すごい渦中にいるのが演劇の魅力である。続いて、DVDを見ながら、日本の現代演劇についてのレクチャーを受けた。

(文責 長野県明科高等学校 上條 晋)



第4分科会

舞台技術創造報告

舞台技術による効果

講師 土屋茂昭／大沢佐智子／長田佳代子／乳原一美／藤田赤目／吉木 均

第4分科会では、照明・音響・大道具などの舞台技術について学ぶ講習を行った。その素材として、昨年長野県の丸子修学館高校によって上演された、「流転とらとら」が使われた。この脚本は、「山月記」を松崎晃先生が脚色したもので、今回の講習では60分の劇を8分に凝縮したものを使った。この劇を、上田市を中心とした12校もの学校の演劇部員が5日間かけて完成させた。

2時間におよんだ講習会では、まず照明と音響をほぼ使わない状態で劇をし、その後参加者の前で照明と音響がプロの手によって作られた。さらに、打ち込んだ照明や音響をしっかりと用いて改めて劇を行い、舞台技術の効果を確認した。



乳原氏によって行われた照明の講習では、まず、ホリゾンライトや地明かりやシーリングなど、仕込まれている基本的な照明についての紹介があった。その後、「流転とらとら」の劇に用いられる照明を順番に作っていった。この際、調光室とのやりとりが参加者にも聞こえるようになっており、プロがどのように照明を作っているかを生で体験することができた。2色の光を用いて虎の影を映したり、月を妖しく表現したり、水面のゆらめきをうちわで表現したり、ハイレベルのように見えるあかりだが、簡単に取り

入れることもできる方法を教えて頂いた。最後に、是非様々なことを工夫しながら、楽しんで安全に照明に取り組んで欲しいと参加者に訴えた。

次に藤田氏によって音響の講習がなされた。音響の仕事は、作品の時間の中に音を配置すること、劇場という空間の中に音を配置することであり、特に後者に関しては舞台がある演劇特有の仕事であると強調された。次に、劇場に設置されているスピーカーについて、その種類や効果についての説明があった。その後、劇に用いられる音響を順番に作っていった。役者と観客、スピーカーと観客との距離感を考えながら、使うスピーカーや音量などを考えていく必要があることや、スペインドラムを使って虎の鳴き声を表現することなど、様々な表現方法を教えて頂いた。

その後、作った照明と音響を用いて劇を行ったが、何も使わなかったときは全く違う臨場感や感動を感じることができた。舞台技術の充実により、劇は何倍も良いものになるということを改めて認識できた。

続いて、大道具作成についてのアドバイスや講師の方々の座談会、参加者による質問会が開催された。参加の高校生からは鋭い視点からたくさんの質問が寄せられ、楽しく温かな雰囲気の中で高校生と講師の方々が交流していた。研修会終了後には、参加者がステージに上がって大道具を見学したり、講師の方に質問したりすることができ、大変充実した研修になった。

(文責 長野県大町岳陽高等学校 左右田奈央)

第5分科会

部活動

部活動を充実したものにするために必要なこと

講師 土田真一／伊藤靖之／岡崎賢一郎

第5分科会は、部活動のあり方について考える講習会であった。各講師より、ご自身の部活動に対する考えをお聞きし、その後、質疑応答という形で、演劇部の生徒自身が日頃の練習の中で疑問に思っていることについて、講師の先生方からご助言をいただいた。



【各講師が思う部活動】

- ① 岡崎先生：「基本、部活は楽しいもの、それが一番。」という岡崎先生。「男女合わせて色々な人がいた方が、芝居が豊かになる。」「全員が舞台に出ることを心がけている。」とのことだった。練習については、公演前か否かで変わるが、言葉よりも身体の重要性に重きを置き、台本を持って立ち稽古するスタイルを取っている。
- ② 伊藤先生：部を作るのに必要な要素として、人数、場所、台本、そして「気持ち」の大切さを挙げていた。「演劇は自由だ、答えは無数にある。」という伊藤先生。部としての目標を立てること、恥をかくことを恥ずかしがらず、部員同士、お互いの長所・短所を認め合うことの大切さも話して下さった。

③ 土田先生（東北芸術工科大学）：前任の山形東高校の演劇部の様子をDVDで鑑賞した際、生徒が主体となり、即興の芝居をやるなど、楽しむ練習を取り入れていると説明して下さった。生徒主体の芝居によって、高校生が舞台上で成長し、それを自ら見ることができることが部活動の醍醐味と語って下さった。

【質疑応答】

- ① 生徒が台本を書くことについて…台本を書く人に演出が集中してしまう大変さもあるが、皆で自由に意見を出し合っ、自分がやってみたいことを演じる面白さがある。配役も、観客からどう見えるかを考え、誰が一番その役にふさわしいか考えられるようになると、芝居がよくなる。
- ② 部員がだらだらしてしまうことについて…スマホ禁止など、時間・空間をルーズなものにしない。

③ 練習が停滞したとき…芝居は掛け合いのスピード感が大事なので、2倍速、4倍速でやってみるとか、テンション高くやってみるとか、エチュードだけの話を作ってみるとか、様々な練習を試すとよい。

【まとめ】

演劇部というチームが、今後の人生においてもつながってほしい。(岡崎先生) 高校演劇のおかれた環境は素晴らしい。人としての成長ができる場。(横田先生) 表現することは人間の根源的欲求である。自分の内面を見つめ、「表現する自分は何者なんだ？」と考えることで、人は成長する。(土田先生)

(文責 長野県南安曇農業高等学校 入山 愛)

第6分科会

生徒講評委員会合評会

感想・意見・思いの共有

担当 生徒講評委員会

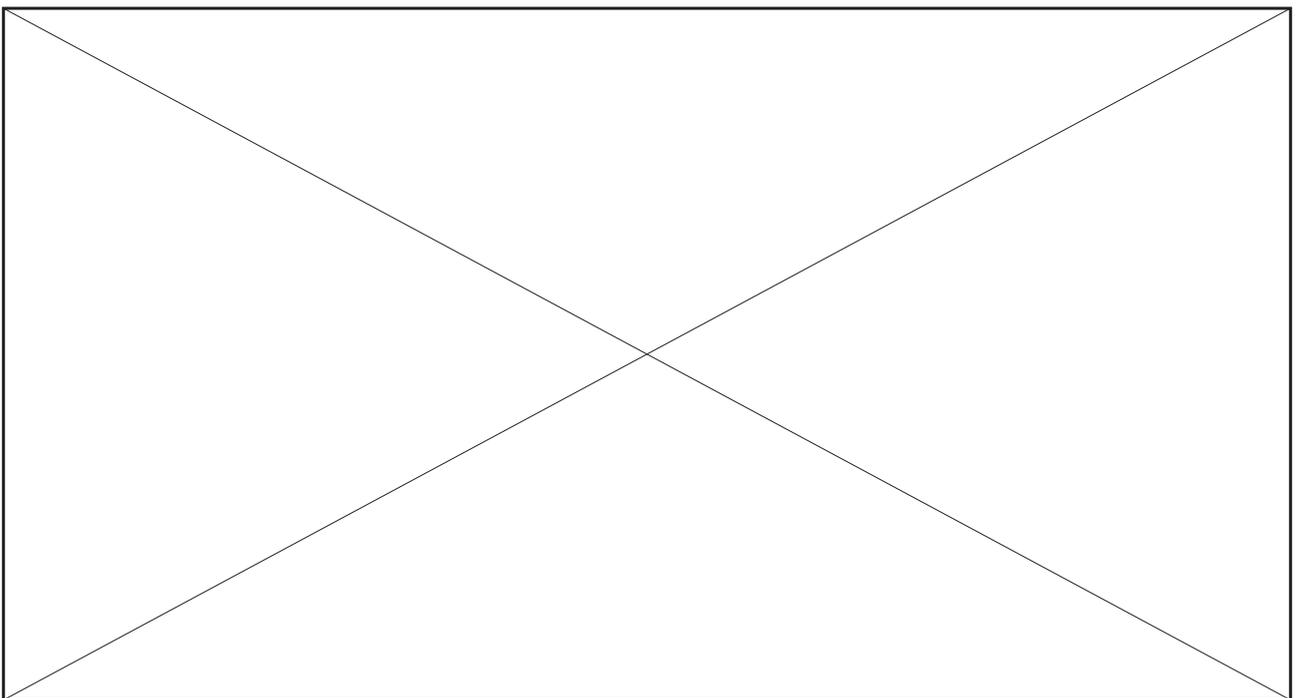
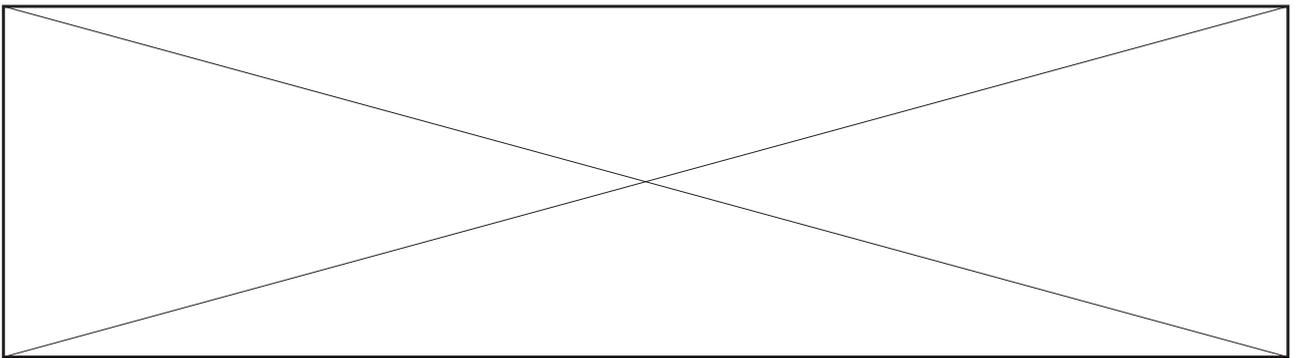
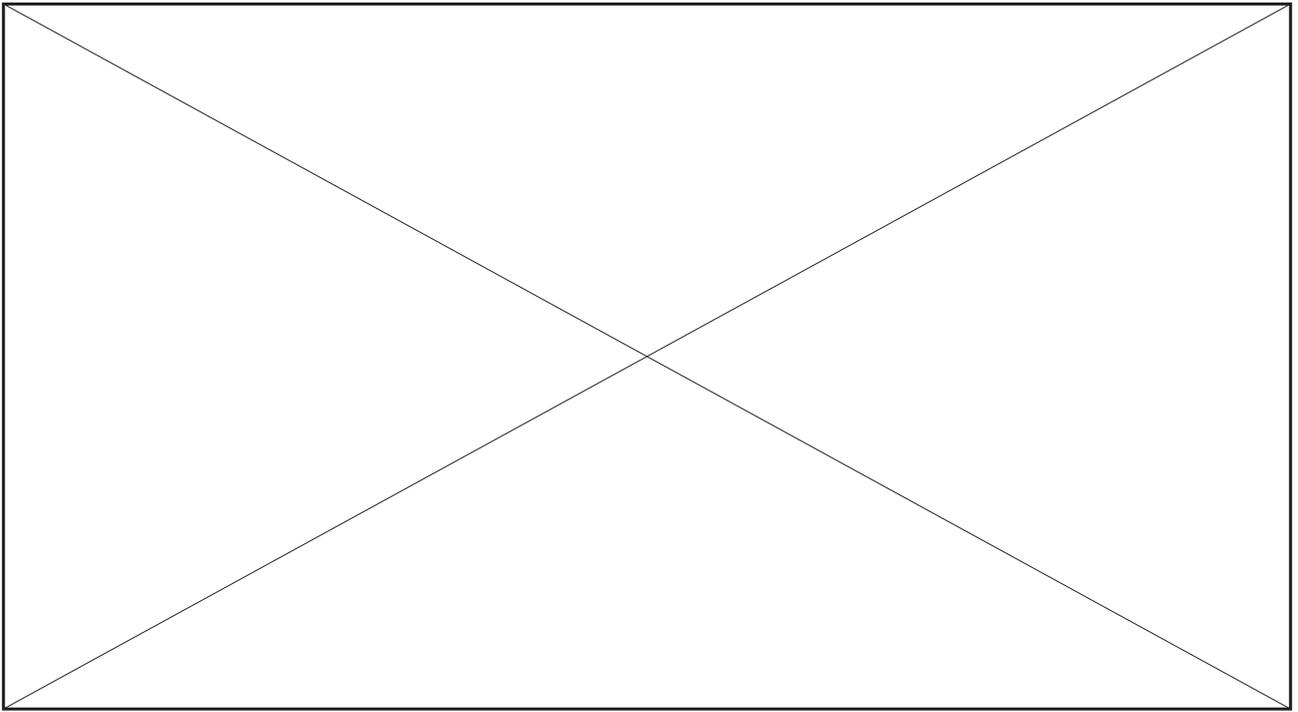
生徒講評委員会の討論内容や上演校の意図、他の演劇部員の意見などを交流する場である。今年度は上演校からも多くの参加者があり、活発な意見交換が行われた。その全てを記す事は出来ないが一部を紹介する。

①【ぼくらの青春ドキュメント】「最後はブレザーでカーディガンが覆われ、カーストが無くなったのかどうか考えさせられた。」「自分達の悩みを出し合い、気持ちを込めたので、伝わったなら嬉しい。」 ②【フットボールの時間】「女性差別について、一つ一つのセリフが続きのセリフがなくても分かった。」「『変わったのかしら』というセリフには『?』が無いのだが、あり無しのどちらが良いのか迷っていて、そう捉えてもらえて良かった。」 ③【卒業】「勢いがある面白い。『卒業』には色々な意味があると感じた。」「大人が泣く所と生徒が泣く所は違う。」 ④【髪を梳かす八月】「原爆投下の瞬間に役者の動作が止まり、市民の生活が終わってしまった事に衝撃を受け、原爆の悲しみを知った。」「『11時2分』を知らなかったが、時計の音で分かった。」 ⑤【Another Lifeが座る場所】「帰還兵のPTSDの話で胸が痛かった。現実と幻覚の区別が分からなくなった。」「現実からかけ離れた題材を選んだのが凄い。」 ⑥【待ちの風景】「コンクリート色の舞台が、公園、ホーム、家と変わっていったのが凄い。」「オレンジの背景でばらばらになるまでの家族の風景が悲しかった。」 ⑦【宇宙の子供たち】「舞台全体が青で子供の夢や希望の広さを表現していた。虐待環境を宇宙にしたのをどう捉えたか。」「虐待そのものを表現したいわけではなく、子供の純粋さや無邪気さや強さを表現したかった。」 ⑧【おにぎり】「爆笑後の静かなシーンで『感謝』について考えさせられた。」「一番練習したのは無言でおにぎりを食べるシーン。表情など。」 ⑨【青春讃夏～僕らの時間～】^{せいしゅんさんか}「偏見に気が付けた劇。理解しているつもりでも気を遣い過ぎるなど無意識に差別していた。」「勇気を持って思いを伝える事。話してみないと分からない。」 ⑩【ガブリエラ黙示録】「最後のシーンでは主人公の机が無くなり、皆と同じ椅子だけになっていて皆と同じ道を選んだと思った。」「主人公だけ椅子に座らなかったので皆と一律にならない道を選んだのではないか。」

⑪【M夫人の回想】「愛がここまで人を狂わせるとは思わなかった。」「画面が塗り潰されていくのは夫のことを考えるあまり頭が塗り潰されているような表現なのか。」 ⑫【Time After Time～インディアンサマーより～】「不登校の記憶や辛い記憶が思い出された。」「最後のシーンで女の子は下を向いて何か言った?」「口パクで『ごめんなさい』と言って頭を下げた。自分の死は変わらないという意味から。」

(文責 長野県諏訪実業高等学校 小池 聡)





事務局通信

第64回全国（長野）大会に合わせて、今年度第2回常任理事会・理事会が、上田市交流文化芸術センターにおいて行われました。はじめに今年度の常任理事、事務局の紹介と役割分担の報告があり、新年度の体制が承認されました。続いて、2017年度の事業報告、会計、会計監査報告、2018年度の事業、予算の承認がなされました。春季大会と同時期に開催される常任理事会・理事会は、来年3月に豊橋で行われます。

長野大会については、一般客と関係者の入場整理が広島大会に続いて行われ混乱の回避が図られました。分科会については、昨年度より新たに加わった「舞台技術創造講習会」が、金井大道具のスタッフに加え劇団四季の協力のもと、実施されました。研究大会の趣旨に則り、出場校の生徒も各分科会に積極的に参加するよう促しました。

次年度の佐賀大会は、九州の交通の要衝・鳥栖で開催されますが、近年話題となっている過酷な夏の気象状況に対応した観客の誘導整理が喫緊の課題となっていると報告がありました。その次の高知大会については、会場の改修スケジュールの関係からプレ大会が実施できないこと、オリンピックと時期的に重なる部分があり、移手段に制約がかかる可能性

があることが指摘されました。両大会とも、ブロックのバックアップによる大会運営が重要な鍵を握ることになります。

第12回春季全国（横浜）大会の上演作品について試行された動画配信については、今回の反応をふまえて豊橋大会でも実施することとなりました。9月に放映されたNHK・Eテレの「青春舞台」も放映後の反響が大きく、今後、メディアとの良好な関係を構築していく中で、生徒の演劇活動の一層の浸透を図っていくことが求められています。

その他、著作権関係について、地区大会レベルからの取組をお願いしたいことが改めて確認されました。また、昨今の「働き方改革」の中で課題のひとつとなっている部活動指導員について、部活動の外部指導員の委嘱に伴う指導、引率のあり方が議題に上りました。今後、全国的な流れの中で、いずれ全国大会においても対応する場面が出てきます。各都道府県の状況を理事会等で情報共有し、一定の位置づけをしていくことになると考えます。

最後に、現・阿部 順事務局長の任期満了に伴う2019年度からの事務局長人事について、規約に基づき、常任理事会から広島県の黒瀬貴之先生が推薦され、承認されました。これまでも常任理事として高演協の運営にも関わってこられました。どうぞよろしくお願いいたします。

（事務局・三上 実）

2017年度 全国高等学校演劇協議会決算報告

＜一般会計＞				
収入の部				
大項目	小項目	予算額	決算額	摘要
基本収入	会費	2,100,000	2,155,000	1,000円×2155校分
	活動報告広告	500,000	880,000	「活動報告集」広告掲載料
その他の収入	寄付金	100,000	100,000	「演劇創造」広告掲載料等
	高文連より	300,000	318,000	高文連より活動補助・旅費
	利息	30	41	三井住友銀行
繰越金	前年度より	3,387,555	3,387,555	繰越金
民間支援	特別協賛金	3,000,000	3,000,000	東京工科大学 日本工学院
	協賛金	1,824,000	1,824,000	NHK・西宮学院・東京フィルム・情報芸術・金井大道具
合計		11,211,585	11,664,596	
支出の部				
大項目	小項目	予算額	決算額	摘要
管理費	旅費・交通費	2,100,000	1,721,242	宮城、神奈川、長野、近距離旅費等
	役員派遣費	350,000	392,670	会長、事務局長旅費
	会議費	80,000	80,000	常任理事会費用
	通信費	170,000	175,477	切手・ファクス・送料・HP維持費等
	印刷費	100,000	53,460	名簿・賞状
	消耗品費	50,000	30,533	文具・タックシール・名刺等
	事務局維持費	70,000	70,000	行動費
	記録費	20,000	20,000	全国大会上演脚本
	雑費	30,000	22,107	謝礼・差入れ等
	事業費	会誌発行	950,000	1,299,894
大会運営費	ブロック連絡費	10,000	7,776	各ブロックへの振込費用
	活動報告集	1,000,000	858,000	活動報告
	渉外費	50,000	50,000	審査員慰労費・弔慰金
大会運営費	ブロック大会	2,000,000	2,000,000	日本工学院ブロック補助(25万×8)
	全国大会	500,000	500,000	日本工学院支援(長野県、チラシ5万円含む)
	春季研究大会	300,000	300,000	特別会計へ
	舞台技術講習会	400,000	359,662	舞台技術講習会補助
予備費		3,031,585	60,000	原稿執筆料
合計		11,211,585	8,000,821	

＜特別会計＞				
収入の部				
大項目	小項目	予算額	決算額	摘要
補助金	全国高文連	300,000	300,000	全国高文連活動補助費
	全国高演協	300,000	300,000	一般会計より
民間支援	協賛金	300,000	300,000	日本工学院支援金
	協賛金	400,000	400,000	多摩美術大学支援金
繰越金		645,263	645,263	前年度繰越金
合計		1,945,263	1,945,263	
支出の部				
大項目	小項目	予算額	決算額	摘要
大会運営費	出場校補助	300,000	300,000	出場校運搬費補助(30,000×10校)
	運営費	1,000,000	1,000,000	消耗品・委託費・印刷費・旅費等
	予備費	645,263	0	
合計		1,945,263	1,300,000	

2018年度 全国高等学校演劇協議会予算

＜一般会計＞				
収入の部				
大項目	小項目	前年度決算額	予算額	摘要
基本収入	会費	2,155,000	2,100,000	1000円×2100校
	活動報告広告	880,000	800,000	「活動報告集」広告費
その他の収入	寄付金	100,000	100,000	「演劇創造」広告費
	高文連より	318,000	289,040	役員旅費・運営費
	利息	41	40	三井住友銀行
繰越金	前年度より	3,387,555	3,663,775	前年度繰越金
民間支援	協賛金	3,000,000	3,000,000	日本工学院
	協賛金	1,824,000	1,324,000	四国学院・桐朋学園・NHK・金井大道具
合計		11,664,596	11,276,855	
支出の部				
大項目	小項目	前年度決算額	予算額	摘要
管理費	旅費・交通費	1,721,242	2,100,000	長野 豊橋 佐賀 事務局会議旅費等
	役員派遣費	392,670	350,000	役員派遣
	会議費	80,000	80,000	臨時常任理事会開催費
	通信費	175,477	170,000	切手、送料、ファクス等
	印刷費	53,460	100,000	名簿、賞状、封筒等
	消耗品費	30,533	50,000	文具、コピー等
	事務局維持費	70,000	70,000	事務局長行動費、会議室代等
	記録費	20,000	20,000	脚本購入等
	雑費	22,107	30,000	謝礼等
	事業費	会誌発行	1,299,894	1,300,000
大会運営費	ブロック連絡費	7,776	10,000	各ブロックへの振込費用等
	活動報告発行	858,000	900,000	各都道府県活動報告集
	渉外費	50,000	50,000	全国大会関係
大会運営費	各ブロック大会	2,000,000	2,000,000	日本工学院支援金(各ブロック25万円)
	全国大会	500,000	500,000	日本工学院支援(佐賀県、チラシ5万円含む)
	舞台技術講習会	359,662	400,000	舞台技術講習会補助
	春季全国大会	300,000	300,000	特別会計へ
予備費		3,663,775	2,846,845	
合計		11,604,596	11,276,845	

＜特別会計＞				
収入の部				
大項目	小項目	前年度決算額	予算額	摘要
補助金	全国高文連	300,000	300,000	春季全国大会運営補助費
	全国高演協	300,000	300,000	一般会計より
民間支援	協賛金	300,000	300,000	日本工学院支援金
	協賛金	400,000	400,000	多摩美術大学支援金
繰越金		645,263	645,263	前年度繰越金
合計		1,945,263	1,945,263	
支出の部				
大項目	小項目	前年度決算額	予算額	摘要
運営費	出場校補助	300,000	300,000	出場校運搬費補助
	運営費	1,000,000	1,000,000	消耗品・委託費・印刷費等
	予備費	645,263	645,263	
合計		1,945,263	1,945,263	

「お知らせ」今年も第64回大会が、無事長野の地で開催をすることができました。これもひとえに現地の先生方や生徒のみなさまをはじめとするスタッフのみなさまの尽力があつたことだと思います。

大会と並行しておこなわれた理事会では、2017年度決算報告と2018年度予算案が審議され、可決承認されました。

私たちの日頃の活動を支えて下さっているのは、民間支援団体の皆様の協力があつたことです。特別協賛団体の東京工科大学 日本工学院をはじめ協賛団体の四国学院大学、桐朋学園芸術短期大学、多摩美術大学、金井大道具などの各支援団体様に心から感謝を申し上げます。

第13回春季全国高等学校演劇研究大会は、2019年3月22日(金)～24日(日)愛知県豊橋市の穂の国とよはし芸術劇場PLATでおこなわれます。ぜひ、足をお運びください。なお、上演校や時間などの詳しい情報は、わかり次第、全国高等学校演劇協議会のホームページに情報を掲載していく予定です。